リコー経済社会研究所

RICOH
imagine. change.

Quarterly

HeadLine

臨時増刊号
2017年4月

地方再生の現場を歩く

2014年4月～2017年3月

地方再生の現場を歩く

コンパクトシティが地方を救う

第1回　2014年10月1日
路面電車フル活用の富山市／大津波から復興目指す山元町（宮城県） 5

第2回　2015年1月1日
「青空」が復活した商店街　米子市（鳥取県） 9

第3回　2015年4月1日
「100年繁栄」目指す宇都宮市／観光資源が豊かな「坂の街」長崎市 12

第4回　2015年7月1日
進化を続ける「ものづくり」　三条市（新潟県）／ 小田原市(神奈川県) 17

第5回　2015年10月1日
サハリン交流に懸ける最北端の街　稚内市（北海道） 22

第6回　2016年1月1日
「龍馬」こそ最強コンテンツ　高知市 26

第7回　2016年7月1日
生物と人の多様性「東洋のガラパゴス」 奄美市（鹿児島県） 30

第8回　2016年10月1日
世界三大夕日が美しい「霧の都」釧路市（北海道） 36

第9回　2017年1月1日
「海の京都」で公共交通の空白解消　京丹後市（京都府） 40

第10回　2017年3月27日
ネコも歩かぬシャッター街に奇跡が… 日南市（宮崎県） 44

東日本大震災・被災地を歩く

3.11を乗り越えて…陽はまた昇る　2014年4月1日
震災復興と構造改革　不撓不屈の**釜石市・大槌町（岩手県）** 48

トリプル被災地を駆けめぐるスーパー医師　2015年7月1日
南相馬市（福島県） 54

ゼロからの3.11復興　長くて短い5年間　2016年3月25日
巨大津波を生き抜いた「奇跡の一本松」　**陸前高田市（岩手県 ）** 55

〔お断り〕記事中の役職や肩書き、年齢などは取材当時のものです。

地方再生の現場を歩くと…

この国は、人類史上例を見ない少子高齢化時代に突入しました。雇用創出の難しい地方からは若い世代の流出に歯止めが掛からず、ひたすら65歳以上の高齢化率が上昇しています。対照的に、東京はヒト・モノ・カネを吸い上げ、一極集中が加速する一方です。

数十年前から今日の人口ピラミッドは予測可能であり、「過疎化」という言葉も盛んに使われてきました。それなのに「不都合な真実」から目を背け、問題の先送りを続けてきた結果、地方と都市の間に著しい不均衡が生じています。高度成長期に政策的かつ大規模に地方→都市へ人口を移動させたのですから、小手先の対症療法や「地方創生」というスローガンだけで今日の不均衡は解消できません。

戦後民主化の一環として、地方自治法が施行されたのは1947年のこと。それから70年の間に少子高齢化が加速し、今や「消滅」の危機に直面する市町村も少なくありません。それでも、地方の現場を取材して歩くと、市民一人ひとりが歯を食いしばり、地域やコミュニティの再生に取り組んでいます。

幸い、IT革命によって日本列島、いや地球全体が小さくなり、地方から情報発信するチャンスは格段に増えました。微力ながらその一助となるべく、連載企画「コンパクトシティが地方を救う」などRICOH Quarterly HeadLine に執筆した記事をまとめました。取材でお世話になった自治体や企業、NGOなど関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

あす何もできなくても、10年後を見据えて行動していきたいと思います。

リコー経済社会研究所　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine　編集長
日本危機管理学会　理事
元時事通信経済部記者・ワシントン特派員

中野 哲也

路面電車フル活用の富山市／大津波から復興目指す宮城県山元町
コンパクトシティが地方を救う（第1回）

社会構造研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　　中野 哲也

市区町村1800の半数に消滅する可能性がある―。日本創生会議（座長・増田寛也元総務相）が今年5月公表した独自推計は、全国の自治体に衝撃を与えた。少子高齢化・人口減少は決して新しい問題ではないが、先送りされてきたのが実情。自治体半減は「不都合な真実」と向き合えという警告だが、人口を増やすには長い時間がかかり、即効薬は見当たらない。では一体どうしたらよいのか。

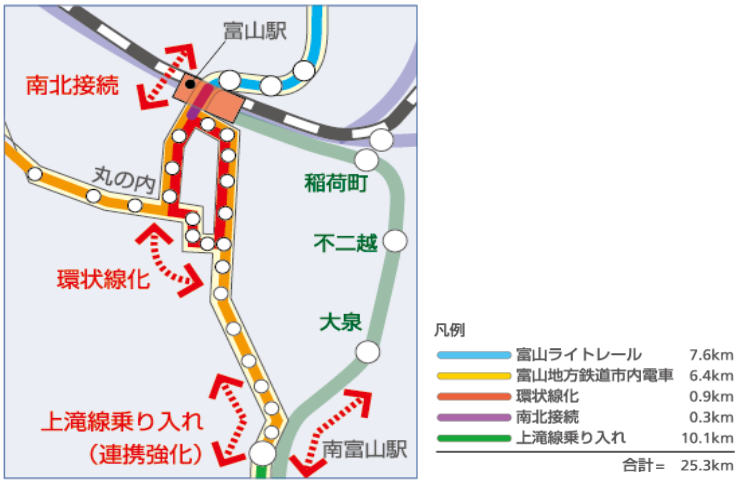
モータリゼーションが地方をクルマ社会に変え、人口は街の中心部から工場が立地する郊外に移動した。「規模の経済」の優位性が疑われず、道路や下水道、福祉といった行政サービスも郊外に拡散した。しかし、グローバル化に伴う製造業の海外移転と、少子高齢化・人口減少が同時進行すると、もはや地方は「規模の経済」を追求できない。

地方活性化の動向に詳しい、慶大大学院システムデザイン・マネジメント研究科の保井俊之特別招聘教授は「米シリコンバレーに代表される、集積効果を追求する『範囲の経済』に変わらない限り、地方自治体の生き残りは厳しい。しかし、インフラ、ハコモノ、住民のネットワークをつなぎ替えるためには、既得権を持つ抵抗勢力と闘う強力な首長の登場が必要になる」と指摘する。今回は、「範囲の経済」として注目を集めるコンパクトシティの実現に向け、難題に挑戦する二人の首長にインタビューを行い、その実情をレポートする。

「串と団子」で生き残り目指す 富山市

全国自治体の中でコンパクトシティ政策にいち早く取り組み、成果を上げているのが富山市（人口約42万人）である。森雅志市長にその本質を尋ねると、「不公平な政策」という答えが返ってきた。「人口減少が不可避になり、右肩上がり時代の市全域（約1242平方キロ）への均質な行政サービス提供は今や、砂漠に水を撒くようなもの。市全体が沈没して生き残れなくなる」という。だから中心部に投資を集中し、居住者をそこに誘導する。市の中心部の地価を維持し、固定資産税や都市計画税などの歳入を確保しようとしている。

富山県議から2002年に市長へ転じた森氏が着目したのは、市内に残っていたローカル線や路面電車、それにバス網である。こうした公共交通を「串」に、駅などを中心とする徒歩圏を「団子」に見立て、串が団子を突き刺してネットワークを形成するコンパクトシティを目指すことにした。



富山市中心部の鉄道ネットワーク（提供）富山市

富山市の森雅志市長

森市長はまず、利用客が減少していたJR富山港線（富山～岩瀬浜）を第三セクターに改め、2006年に日本初の本格的なLRT（次世代型路面電車）「ポートラム」として蘇生した。LRTは床が低いため、お年寄りでも楽に乗り降りできる。運転間隔を30～60分から10～15分に短縮し、運賃も200円均一制に。駅の数も増やし、乗客目線でサービス向上を図った結果、開業前と比べて利用客数は平日で2.1倍、休日は3.4倍に急増した。市の調査によると、LRT開業までは出歩くことの少なかった高齢者ら、新規乗降客が全体の2割を占めている。

（上）ホーム高さの違いに注目！
左が現行LRT、右はJR時代
（東岩瀬駅）
（右）富山市内を快走するポートラム

次に、森市長は市内電車を約900メートル延伸し、2009年に環状線「セントラム」に造り替えた。ポートラム同様、低床のLRTで運賃も200円均一制である。延伸によって市電と富山城址がコラボする美しい景観が生まれたほか、市民のライフスタイルに変化が生まれた。例えば、中心部での休日の平均滞在時間は自動車利用者113分に対し、環状線利用者は128分と15分も長い。消費金額も自動車は9207円にとどまるが、環状線では1万2102円に達する。クルマを自宅に置いて、市内で酒を楽しむ人が着実に増えているという。

（上）富山城址とセントラム
（右）レトロな旧型電車も健在

森市長「市民にお金をもっと使ってもらう」

農閑期の副業として始まった「富山の薬売り」に代表されるように、富山市民は働き者で質実剛健といわれる。総務省の家計調査（2012年）によると、勤労者世帯の実収入は都道府県庁所在市の中で３位。借金が少ないため、可処分所得と貯蓄率は１位である。半面、消費支出は21位、消費性向は47位にダウンする。森市長は「住宅と耐久消費財を買ったら、後はひたすら貯め込むという市民性。富山市が生き残るため、市民にお金を使ってもらうことが私の仕事だ」と言い切る。

そこで、森市長は人口減少時代の消費のカギを握るお年寄りに外出を促そうと、「おでかけ定期券」というサービスを始めた。 65歳以上の市民がこの定期券（年間1000円）を買うと、市内各地から中心部までの公共交通運賃が一律100円（午前９時～午後５時）。高齢者の４人に１人がこの定期を持ち、一日平均2500人超が利用する。

セントラムでお年寄りが気軽に外出

また、指定花屋で花束を買って市内電車に乗ると、運賃が無料になるサービスもある。その意味を聞くと、森市長は「私も何だかよく分からないけど、何となくオシャレだし、街に行きたくなるじゃない」と笑みを浮かべた。「人を動かす三大要素は、楽しい、美味しい（お買い得感も含む）、オシャレ」というのが市長の持論。「その三つのどれかあれば、人は用がなくても街中に出掛けて行く」―

北陸新幹線が来春開業すると…東京から2時間で

公共交通網を整えても、市民が郊外から中心部に住み替えてくれなければ、コンパクトシティは実現しない。このため、富山市は中心部に移る市民などを対象に各種の助成制度を導入している。例えば、住宅購入者に50万円、賃貸生活者には家賃補助月１万円（３年間）を支給する。建設業者の共同住宅建設に対しては、一戸当たり100万円助成する。その結果、転出が続いていた中心部の人口が2008年から転入超過に様変わりした。また、中心部の歩行者数の増加に伴い、シャッターが目立つ商店街の空き店舗率もわずかながら改善している。

中心部商店街で空室率が低下

しかし、コンパクトシティの完成度としては、森市長は「まだ60%ぐらい」という。インフラ整備では、JR富山駅で分断されているポートラムとセントラムを接続するという、難題を仕上げなくてはならない。ソフト面でも、「コンパクトシティ化で高齢者の外出が増え、健康寿命が延びることを証明したい」と意気込む。実際、市が「おでかけ定期券」の利用者を調査したところ、一人当たりの歩数が一日1309歩増加。その医療費削減効果は一人一日約80円、定期券利用者全体では年7560万円に上るという。

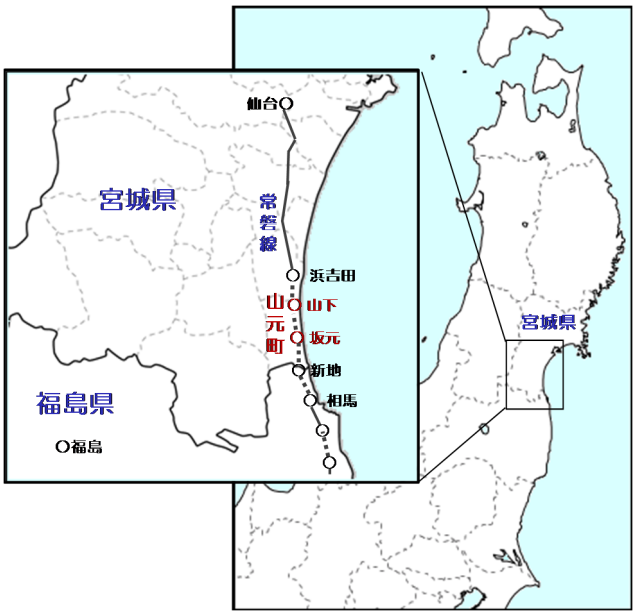
今、来春の北陸新幹線開業に向けて、JR富山駅では改築工事が急ピッチで進んでいる。東京とは２時間強で結ばれるから、今より1時間以上も短くなる。日銀富山事務所の伊藤栄所長は「優秀な人材を確保するという意味で、新幹線は富山市の新たな武器になり得る」と予想する。新幹線が森市長の創造力を刺激し、富山市のコンパクトシティ政策は更なる進化を遂げるかもしれない。

北陸新幹線工事中のJR富山駅

震災後、人口が2割減少　宮城県山元町

コンパクトシティ政策は、「東日本大震災で被災した過疎地域でこそ有効に機能するのではないか」（前出の保井俊之・慶大特別招聘教授）とも期待される。ゼロからの街づくりを余儀なくされた被災自治体が、住宅や交通インフラ、公共施設を安全性の高いエリアに集約し、少子高齢化・人口減少を乗り越えようという考え方である。

東日本大震災で大打撃を受けた宮城県亘理郡山元町。斎藤俊夫町長はコンパクトシティを軸にして、町を復興しようと奮闘している。太平洋に臨む同町は「東北の湘南」といわれるほど、夏冬も過ごしやすい気候。冬もクローズしないゴルフ場には北海道などからゴルファーが集まり、イチゴやリンゴ、ホッキ貝といった幸にも恵まれる。近年は電車で40分の仙台市のベッドタウンとなり、最盛期の人口は１万8000人を超えていた。



（作成）花原 啓

山元町の斎藤俊夫町長

巨大津波に襲われたJR常磐線

しかし、それでも少子高齢化・人口減少には抗し切れない。山元町の人口がジリジリと減り始めたところに、12メートルもの巨大津波が襲ってきた。人口の４％に当たる635人の尊い命が失われ、可住地域の６割が浸水した。唯一の鉄道であるJR常磐線が被災し、同町内の区間は未だ不通。仙台市への通勤・通学客が次々に町から出て行ってしまい、人口は震災前の１万6695人から２割以上も減り、今年7月末に１万3000人を割り込んだ。

斎藤町長は宮城県庁時代、政令市を目指す仙台市の広域合併に尽力した。2010年４月、山元町長に初当選すると、「高齢化率３分の１超の山元町は生き残れない」と危機感を抱き、秘かに隣接する亘理町との合併構想を練り上げた。なぜなら、一般会計が50億円規模の山元町単独では、「投資的経費が６億～７億円程度しかなく、その大半が道路や排水路などの維持・修繕費に消えてしまう」からだ。

町立中浜小学校では「ブルー線」まで津波が押し寄せたが、児童全員が三角形の屋根裏部屋に無事避難

隣町との合併も…「コンパクトな街にするしか…」

ところが、翌2011年3月11日の巨大津波はこの合併構想も押し流してしまい、斎藤町長は茫然とするほかなかった。建て替え中の実家が水没し、町長も被災者となる。震災直後は車上生活。その後は町役場に泊まり込み、寝食を忘れて復興の陣頭指揮を執り続ける中、「町を再生させるには、コンパクトシティを導入するしかない」と確信するようになった。

JR東日本が常磐線不通区間を内陸側に移設した上で復旧させる方針を固めると、斎藤町長はそれに合わせて３つの市街地を新たに整備するコンパクトシティ計画を打ちだした。被災住民をこのエリアに誘導し、学校や保育所、公園、防災センター、ショッピングセンターなどを建設。開発総面積は東京ドーム約12個分の56ヘクタールに上り、2015年度に真新しい住宅757戸が誕生する。

仮庁舎のままの山元町役場

この計画を策定する前、山元町は住民に対して意向聴き取り調査を行い、約7割の支持を得た。しかしながら、新市街地や常磐線新区間から離れてしまう住民の不満は根強く、斎藤町長は今年4月の町長選で再選されたものの、「反コンパクトシティ」を掲げた元町長とはわずか194票差だった。だが選挙後もひるむことなく、斎藤町長は「未曽有の巨大津波を経験した山元町にとって、コンパクトシティは必然的な対応。その成功こそが、全国からの大変有難いご支援に対する恩返しになる」と語り、粘り強く町民の説得を続けている。

ただし、一つ深刻な問題が発生している。小さな町がこれだけの大事業を進めているのに、町役場のマンパワーが圧倒的に足らないのだ。震災前に比べると予算は10倍の560億円（2013年度当初）まで膨らんだが、職員数は1.6倍しか増えていない。しかも総勢296人のうち115人が他自治体からの派遣職員であり、その３分の２が一年で交代する。「町役場には毎日、ありとあらゆる案件が持ち込まれている。コンパクトシティを成功させるためにも、長期の職員派遣をお願いしたい」―。斎藤町長は悲痛な叫び声を上げている。

（上）新市街地の開発現場
（下）復興工事が続く磯浜漁港

山元町に残る唯一の本格的な宿泊施設が、江戸時代末期の創業という磐城屋である。7代目主人の斎藤次郎さん（80）は「昭和30年代までは富山の薬売りが上客だったし、その後は学校の先生がたくさん下宿してくれた。バブル期は北海道からのゴルフ客で繁盛したんだよ」と懐かしそうに話す。

斎藤さんは大津波で愛車を失い、旅館も浸水して営業不能になり、「俺の代でけじめを付けろということか…」と気持ちは廃業に傾いた。しかし、大震災後初めての盆が近づいてくると、近所から「家族や親戚が帰郷してくるのに、泊まる所がないんだよ」という声が聞こえてきた。斎藤さんはコツコツ貯めていた300万円を投じて旅館を修繕し、急きょ営業を再開した。

ところがその後、山元町が「コンパクトシティ計画の一環で道路を通したいから、旅館の建っている土地を譲ってほしい」と打診してきた。再び斎藤さんは悩み始める。「先祖代々の土地を手放してよいのか」と自問を続けているうちに、「自分が生まれ育った山元町がコンパクトシティで生き残ることができるなら…」―。斎藤さんは150年の歴史を刻み込んできた旅館と土地を手放す決断をした。

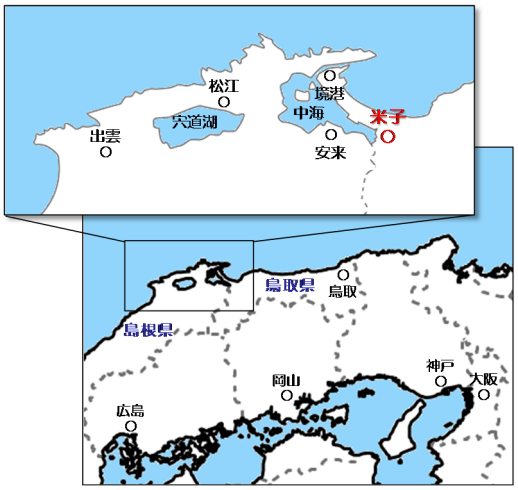
（左）磐城屋7代目主人の斎藤次郎さん
（下）歴史を刻み込む磐城屋の中庭

（写真）筆者
PENTAX K-50使用

「青空」が復活した商店街（鳥取県米子市）
コンパクトシティが地方を救う（第２回）

社会構造研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　　中野 哲也

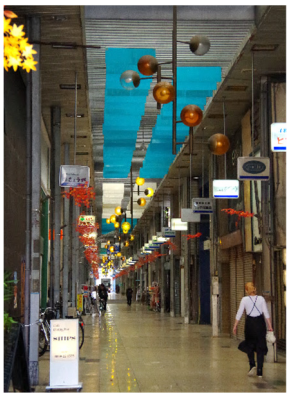
シャッター街と化した商店街はどうすれば息を吹き返すのか―。少子高齢化に苦悩する地方都市の共通課題である。しかも財政事情はどこも厳しいから、投入できるヒト・モノ・カネは限られる。米子市（鳥取県）は最小の投資で最大の効果を得るため、コンパクトな街づくりを推進する。発想の転換で中心市街地の再生は成功を収めつつあり、「米子方式」が全国の自治体から熱い視線を送られている。



（作成）花原 啓

米子市中心部にある商店街の一角では、他の地方都市と同様、シャッターの閉まった店舗が並んでいる。交通の要衝、あるいは商都として「山陰の大阪」と呼ばれていた面影はない。

70年以上も前に開業したというボタン専門店を訪ねると、数千に上るボタンがデザインやサイズごとにきちんと整理され、うず高く積み上げられていた。色とりどりの輝きを目にすると、ついつい見惚れてしまう。



店主（78）は「この商店街が最も活気にあふれていたのは昭和30年代。ここに来れば、何でも手に入ったからね。その後、郊外に大型店舗ができると、店が一軒また一軒閉まり、何もそろわない商店街に変わり果てた。最近の若い人はケータイをいじるのに忙しく、裁縫をしてくれないし…」と溜め息をつく。この店も後継者がいないため、いずれ畳まなければならない。古びたアーケードで陽射しがさえぎられ、重苦しい空気が漂う中、店主の言葉の一つひとつが胸に突き刺さる。

「このままではスラム街」“改革派”商店主が･･･

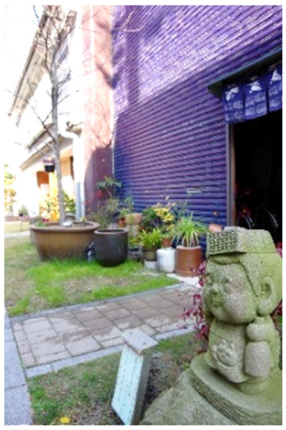
ところが、通りを挟んで反対側の商店街には青空が広がっていた。実はこの「ほっしょうじ（法勝寺）通り」も、かつては老朽化したアーケードが通りを覆い、各商店主は頭を抱えていた。2007年に落下物事故が起きてしまい、商店街は窮地に追い込まれる。「このままではスラム街になりかねない」と立ち上がったのが、創業500有余年の仏具店「石賀本店」を営む石賀治彦さん（49）ら“改革派”の商店主である。

商店街復活に立ち上がった石賀治彦さん

当時、商店街の半分を空き店舗が占め、振興組合も既に解散していた。年180万円に達していたアーケードの電気代を節約するため、照明を夜だけにしたが、それでも100万円かかる。1000万円と見積られたアーケードの撤去費用を捻出できるわけもなく、石賀さんは途方に暮れる。ジャンボ宝くじを1回10万円ずつ購入したが、当然、かすりもしない。

しかし、石賀さんはへこたれない。同志と飲みながら知恵を絞り合い、街づくり会社を設立。経済産業省の補助金や米子市からの協力を受け、アーケード撤去だけでなく、商店街の「公園化」に取り組むことを決断した。石賀さんらは全国各地の商店街を視察した上で、「空き店舗を全て埋める」あるいは「全国的な観光地にする」といった非現実的な選択肢を排除し、あくまで「身の丈に合った街づくり」に取り組んだ。

石賀さんらは200メートル四方の47世帯を一軒一軒回り、粘り強く説得して商店街の再生策に同意を取り付けた。そして2011年3月、ついに商店街が生まれ変わる。幅約6メートルの道路の半分に芝生を敷き、植木鉢や木製ベンチを置いた。直線だった通りに緩やかなS字カーブを採り入れ、自転車を突っ走れなくするなど、歩行者への配慮が随所にうかがわれる。そして、幼児の目線に合わせて「七福神」のモニュメントを設置した。モデルは実在する地元の人であり、「はっちゃん」や「なみちゃん」といった愛称が付いている。



石賀さんの店の倉庫はリノベーション後、「善五郎蔵」になり、お洒落なカフェが営業中。商店街には待望の新規出店も実現し、美容院と子供向け英会話教室が仲間入りした。アーケード撤去で青空が復活し、商店街を苦しめていた電気代も激減。照明にLEDフットライトを導入した結果、電気代は月2000円で済むようになったという。

「ほっしょうじ通り」の再生劇は苦難の連続だったが、今では中心市街地活性化のモデルケースとして注目を集め、全国から商業や行政の関係者が視察に訪れる。石賀さんは「最悪の商店街だったからこそ、公園化を実現できた。『ほかに選択肢がない』ことが最大の武器になる。成功率４割でも、先ずはやってみることが大事ではないか」と話す。商店街は息を吹き返したが、石賀さんは「完成度はまだ6～7割程度。最終的には公園から『森』を目指したい」と目を輝かせている。

衰退していく故郷　私財投じて遊覧船船頭に

米子市内をお手軽に散策するなら、加茂川・中海遊覧船がお勧めである。サケも遡上して来る旧加茂川沿いに白壁土蔵などが残され、中海に出れば米子城址から名峰大山（だいせん）まで一望できる。

半ばボランティアとして、この遊覧船の船頭を務めるのが住田済三郎さん（74）。米子をこよなく愛し、「少子高齢化や都市間競争の中で、故郷が衰退してしまう。何とかしなくちゃ！」と立ち上がった。還暦を過ぎてから船舶免許を取り、私財を投じて200万円の遊覧船を購入した。住田さんのガイドは歴史上の秘話を盛り込んだり、現代の政治を風刺したり…。50分間の遊覧中、退屈することがない。

遊覧船の船頭を務める住田済三郎さん

しかし、取材で訪れたのが昨年11月後半の三連休中にもかかわらず、乗客は筆者も含めて3人だけ。「米子には観光資源があるのに、それを国内外に発信できていない」―。住田さんはこうした現状に我慢ならない。

隣接する境港市は「ゲゲゲの鬼太郎」で有名な漫画家水木しげる氏の故郷であり、「妖怪」を売りにした町興しで大成功を収めた。住田さんはそれからヒントを得て、河童伝説が残る旧加茂川沿いを全長300メートルの「カッパロード」にしようと孤軍奮闘している。河童のモニュメントはまだ４体だが、「全国から寄付を募り、将来は100体まで増やしたい」―。古希を過ぎてなお意気軒高である。

「生活充実都市」を目指す野坂市長

コンパクトシティ化といった地方再生の舞台裏には、米子に限らず、石賀さんや住田さんのような市民の情熱が必ず存在する。それを行政が見いだし、支援していけるかが成功のカギを握っている。「生活充実都市」の実現を掲げる、米子市の野坂康夫市長（2003年就任）に街の将来ビジョンについて聞いた。

米子市の野坂康夫市長

米子市は中心市街地（約300ha）のにぎわいを取り戻すため、その活性化基本計画（第一期2008年11月～2014年3月、第二期2014年4月～2019年3月）を策定し、様々な事業に取り組んできた。しかし自治体にありがちな、再開発の美名の下でのハコモノ造りではない。野坂市長は「身の丈に合った事業に取り組み、それらの『点』と『点』をつないで『線』にしながら、中心市街地を街の『顔』や『心臓』として復活させたい」と強調する。

中心市街地の中でも、米子市は前述した商店街のほか、図書館・美術館・公会堂などの公共施設、さらに歴史・文化遺産が集中するエリアを「にぎわいトライアングルゾーン」と定め、集客力の拡充や居住性の向上に重点的に取り組んでいる。

閉店した大型書店の建物を修繕・再活用した上で、ブティックや雑貨店に入居してもらい、「米子の代官山（東京都渋谷区）」を目指すプロジェクト。若い起業家を支援するため、情報発信のサテライトスタジオやミュージアムを併設した複合施設。お金をあまりかけなくても、にぎわいを取り戻そうという創意工夫が至る所に見られ、「選択と集中」でシャッター街をコンパクトシティに再生しようという官民の熱意が伝わってくる。

ＪＲ米子駅前の「米ッ子合掌像」

こうした中心市街地活性化策は「米子方式」と呼ばれるようになり、全国から注目を集めている。ただし、必ずしも順風満帆というわけでもない。基本計画第一期では、歩行者通行量2万1319人（2007年比5.1％増）を目指したが、実際には1万8744人（2013年）にとどまった。また、市民の憩いの場である湊山公園の入場者数や、旅行者向け下町観光ガイドの利用者数も目標に届いていない。

米子市は企業誘致に力を入れ、15万人規模の人口を必死で維持してきた。だが高齢化の荒波には逆らえず、2040年には11万6000人まで減少する（日本創生会議推計）と予測されており、いかにして観光客などの「滞在人口」を増やすかが課題だ。幸い、この点では米子市には都市間競争力が潜在する。北に日本海、東に大山、西には中海という豊かな自然に恵まれる上、山陰唯一の国際航空路線（米子～ソウル）を有する米子鬼太郎空港のほか、鉄道・高速道路も古くから整備されているからだ。

米子市は島根県の松江、出雲、安来の各市と鳥取県の境港市、西部７町村とともに「中海・宍道湖・大山圏域市長会」を構成している。産業・観光振興の協働や環境保全のほか、圏域内で連携して婚活支援事業を行うなど、県境や市境にとらわれることなく、幅広い政策課題に取り組む。「市民一人ひとりが豊かな自然を享受しながら、働く場があって、希望と誇りを持って充実した生活を送ることができる街」（野坂市長）という目標の実現に向け、米子市はゆっくりかもしれないが、着実に前進している。

米子市が臨む中海の夕景

（写真）筆者
PENTAX K-50使用

「100年繁栄」目指す宇都宮市／観光資源が豊かな「坂の街」長崎市

コンパクトシティが地方を救う（第３回）

社会構造研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　中野 哲也

「コンパクトシティ」と言ってもその定義は様々であり、全ての自治体に当てはまる「模範解答」は存在しない。当然、街ごとの実情に即した政策が求められる。平地が大半を占める宇都宮市（栃木県）と、山が迫り坂の多い長崎市（長崎県）の地勢は対照的だが、奇しくも両市は「ネットワーク型コンパクトシティ」を目指している。単なる中心市街の復活にとどまらず、中心と周辺の整備拠点、あるいは拠点同士を公共交通網で結びながら、人口減少・少子高齢化を乗り越えようとしている。今回は個性豊かなこの二つの県都を取材して歩いた。

「餃子」が最強の観光コンテンツ　宇都宮市

東京駅から東北新幹線でわずか50分。北関東最大の都市、宇都宮市（人口約51.8万人）の玄関口であるJR宇都宮駅で降りると、ユーモラスな「餃子像」が出迎えてくれる。この街は餃子こそが最強の観光コンテンツであり、市内全域に「餃子」の看板が立ち並ぶ。その数は宇都宮餃子会の加盟店だけで80に上り、非加盟店を加えると350あるいは400に達するといわれる。

宇都宮餃子会が運営する「来らっせ」を訪ね、事務局長の鈴木章弘さん（42）に案内していただいた。ここは幾つかの名店の餃子を同時に楽しめるスポットであり、市民や観光客が月平均2万5000人も集まり、推計月45万個の餃子が飛ぶように売れる。宇都宮餃子の起源には諸説あるが、戦後の中国からの帰還兵や旧南満州鉄道（満鉄）の職員・家族が大陸の味を懐かしみ、当地で再現したらしい。小麦粉や豚肉、ニラ、白菜といった餃子の具材が宇都宮で入手しやすいこともあり、専門店が市内に続々と生まれ、家庭でも定番メニューになった。

宇都宮餃子会の鈴木章弘さん

宇都宮餃子会のスポークスマンを務める鈴木さんはコメを食さず、餃子を「主食」と言い切る。朝から食べ始め、普段は一日に餃子二食、多い時は五食にも。「栄養価が高く、バランスも取れた『完全食』だし、飽きが全く来ないんです」と笑みを浮かべる。

老舗の一つ「宇都宮みんみん」の調理場で名人芸を見せてもらう。焼き上げる時間は通常7～8分だが、「その日の天気や温度、湿度、具の野菜の状態によって微妙に違う。納得のいく餃子を提供できるまでには10年かかる」―。蓋をしてしまうから、「ジリジリ」→「チリチリ」といった音の微妙な変化で焼き上がりを判断するしかない。

餃子の一世帯当たり購入額（総務省家計調査）をめぐっては、宇都宮市と浜松市（静岡県）が激しいバトルを演じている。一昨年、宇都宮が3年ぶりの日本一に輝いたが、昨年は浜松がその座を奪還した。しかし、この統計は消費者が惣菜として購入する餃子が対象であり、外食分は含まない。

このため、鈴木さんは「1位でも2位でも気にしない」という。ただし、現状に満足しているわけではない。「“大阪のタコ焼き”“広島のお好み焼き”“札幌の味噌ラーメン”の域にまで、宇都宮餃子の知名度を引き上げたい。そのためには、万事遠慮がちな宇都宮市民が『餃子が大好き！』と胸を張って言えるよう、意識革命を起こさなくては･･･」―

「SMAP型」コンパクトシティを目指す佐藤市長

宇都宮市の佐藤栄一市長も無論、大の餃子好き。専門店に冷蔵餃子を買いに行き、自宅の冷蔵庫で欠かしたことはない。宇都宮市もこれから人口減少が本格化するが、市内には観光資源が乏しいため、餃子を「国内外からの観光客など滞在・交流人口を増やすための武器」に位置付けている。

実業界から政界に転じた佐藤市長は向こう5年間、市民の居住性向上に全力を挙げると同時に、「100年繁栄都市」を政策目標に掲げる。短期と長期の「複線」行政である。「市民受けする目先の人気取り政策に走れば、市債残高をいたずらに増やすだけ。財政面でまだ余裕のあるうちに改革を断行する。これは民間企業も同じではないか」と指摘する。

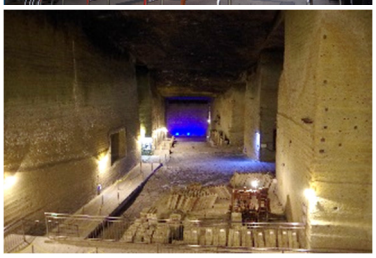
佐藤栄一市長

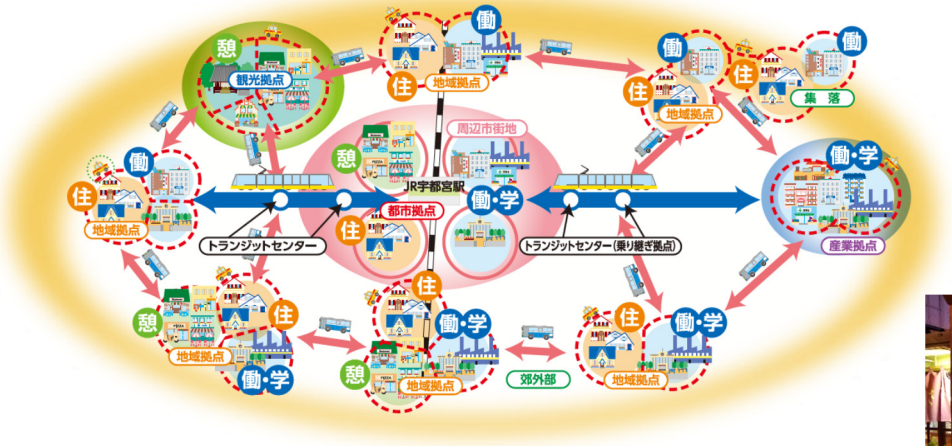
宇都宮は広い市域（約417km^2）を抱える。しかもその8割が平らで「市内各所に人と建物が張り付いている」ため、行政の効率は良くない。少子高齢化が加速すれば尚更だ。そこで佐藤市長が掲げているのが、「ネットワーク型コンパクトシティ」である。中心部を都心拠点、工業団地を産業拠点などと位置付け、拠点間は公共交通で自由に移動できるようにする。

ただし、宇都宮には街を横断する鉄道がなく、JR線で東西に分断されてきた。このため、宇都宮市はJR宇都宮駅東口から東部の工業団地を結ぶLRT（次世代型路面電車）を建設する。来年着工し、東京五輪に間に合うよう2019年開業を予定している。

LRTやバス、オンデマンドタクシーなどによって、佐藤市長は「SMAP」型のコンパクトシティを目指すという。「一人でも十分やっていける5人のメンバーが集まり、強力な国民的アイドルグループを形成している。それにならい、市内の拠点の一つひとつに独自の顔を持たせ、LRTなどで結んでネットワーク化する。それによって強力な光を放つという都市構造を目標にしたい」―

東京駅から新幹線で50分という地の利は、宇都宮市に都市間競争力をもたらす。建材として有名な大谷石（おおやいし）の産地である大谷地区など、素敵な観光スポットも抱えているが、東京から近過ぎて「通過都市」になってしまうリスクもある。このため、佐藤市長が先頭に立って「住めば愉快だ宇都宮」というPR作戦を展開。大都市と宇都宮の両方に仕事や暮らしの拠点を置き、そこを行き来しながら、ライフスタイルを充実させるという「ダブルプレイス」（二地域生活）を提唱する。人口減少時代に立ち向かう、意欲的な取り組みとして注目を集めそうだ。





（提供）宇都宮市

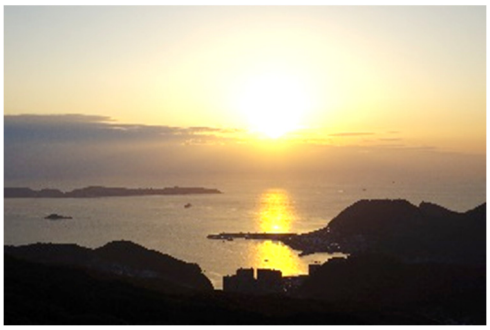
「軍艦島」や「世界新三大夜景」も…長崎市

徳川幕府が断行した鎖国政策の下でも、長崎市の出島だけは外国との接点となり、貿易港として繁栄した。古くから西洋文化が流入したため、市内にはグラバー邸や眼鏡橋など観光客を引き付けるスポットが少なくない。だが恵まれた環境に安住するなら、激化する都市間競争で後れを取る。市は危機感を募らせ、新たな観光資源の開発に取り組んでいる。

長崎港から南西約19キロの海上に浮かぶ端島（はしま）。その独特な外観から「軍艦島」の通称で呼ばれ、「どうしても上陸したい」という観光客が国内外から集まる。この島は41年前の海底炭鉱閉山で住民が一斉に引き払い、時計の針が止まったまま無人の廃墟と化している。軍艦島では三菱が海底炭鉱として開発を進め、本格操業した1891年から閉山の1974年までに1500万トン超の石炭を掘り出し、日本の近代化に貢献した。

軍艦島は周囲わずか1.2キロの非常に小さな岩礁だが、最盛期には約5300人が住んでいた。1916年に完成した日本初の鉄筋コンクリート造りの高層アパートは、石炭採掘に関わる従業員やその家族向けの社宅。幹部社員用の社宅は小高い丘の上に立ち、「全室オーシャンビュー」のリゾートマンションといった趣である。このほか、学校や採炭施設などが閉山当時のまま遺されており、島全体が「タイムカプセル」。近年、軍艦島が新たな観光資源として注目されるようになり、世界文化遺産への登録運動とともに、アジアからの観光客も急増している。

軍艦島とともに、長崎市が新たな観光コンテンツとして売り込んでいるのが、稲佐山（標高333メートル）からの夜景である。東京タワーほどの高さだが、山に囲まれてすり鉢状の長崎市街を一望できるため、眼下には宝石箱をひっくり返したような光景が広がる。反対側の東シナ海を望む夕景も旅行者のハートをがっちり掴む。長崎が2012年に香港、モナコと並ぶ「世界新三大夜景」に認定されると、中国や韓国などから見物客が押し寄せるようになった。昨年、長崎に寄港するクルーズ船は過去最高の75隻を記録し、今年は120～130隻が見込まれるという。



「市民の下駄」はどこまで乗っても120円

長崎市は観光資源に恵まれ、その新たな開発も進めながら、交流・滞在人口の増加に努める。だが、定住人口は50万人を割り込んでいる（約43.3万人）。

平らな宇都宮市とは対照的に、長崎市の地形はすり鉢型で平地が少ないため、斜面にも住宅を建てる「坂の街」として繁栄してきた。しかし、日銀長崎支店の佐藤聡一支店長は「高齢化により、坂の多い傾斜地から平地への移住が進みつつある」と課題を挙げる。その一方で、「すり鉢はいわば天然のコンパクトシティ。中心部の街の賑わいや機能性が高まる潜在力がある」と指摘している。

コンパクトシティを目指す上で、長崎市には心強い援軍が存在する。宇都宮市はLRT新設に挑戦しているが、長崎市内には昔ながらの路面電車（長崎電気軌道）が健在なのである。4系統で市街地の各エリアを結び、日中でも5～6分間隔で走っているから、市民にとってはまさに下駄代わりだ。

私企業による経営だが、全区間均一の運賃は1984年から実に25年間も100円のまま据え置き。2009年に120円へ値上げした後、昨春の消費税増税後も変わらない。どこまで乗っても120円、一日乗車券なら500円で何度でも自由に乗降できる。東京都や大阪市、仙台市などから廃止車両を譲り受け、丁寧に修繕した上で使うなど、知恵を働かせて低運賃を維持する。また、市内ではバス路線網も充実しており、地方都市としては運賃が格段に安い。

長崎市の田上富久市長はこうした公共交通網をフル活用しながら、宇都宮市と同様、「ネットワーク型コンパクトシティ」を目指して街づくりを推進している。まずコミュニティにしっかりとした自治を求め、自分たちでできなければ隣のコミュニティ、それでも不可能なら中心部に行くというイメージである。「企業や大学、病院なども含めて全員参加型になる時、最も暮らしやすい長崎独自の街づくりが完成する」―

田上富久市長

例えば、長崎市は全国の県庁所在地の中で市立図書館の整備が最も遅れていたが、ITの活用などにより、「全国で最も効率的で利便性が高い」と自負する図書貸し出しネットワークを築き上げた。大型図書館を市の中心部、それに次ぐ規模の図書室を比較的大きな公民館、小型の図書室を小さな公民館にそれぞれ設置。小さな図書室しかないエリアの住民でも、大型図書館から読みたい本が届くという仕組みである。

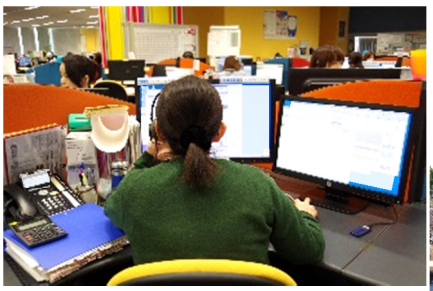
外資系保険会社のコールセンターが集中

田上市長は「長崎には豊かな自然や個性的な文化があり、落ち着ける時間が流れ、人と人の絆も存在する。ただし、仕事がない。『地元に戻りたい』という若者は多いのに、それに応えられるだけの雇用を用意できない」と打ち明ける。「市内に工場を誘致しようとしても、長崎は東京から見れば西の端にあり、水の事情が良くないから、なかなか実現しなかった」―。コンパクトシティを目指す上でも、雇用創出が喫緊の課題である。

ところが近年、「西の端」という長崎市のデメリットが企業の目にはメリットとして映るようになった。東京一極集中では大規模災害が発生した時、事業を続けられなくなるため、事業継続計画（BCP）の中で一部業務を長崎市内に移管しようというわけだ。とりわけコールセンターの適地として、外資系保険会社の進出が活発化している。人口対比で市内には高校・短大・大学が多いため、優秀な女性の人材を大都市に比べて低い人件費で集めやすいという要因もある。

メットライフ生命保険は長崎ビルを東京、神戸と並ぶコールセンター拠点に位置付け、約1400人を雇用し、うち85%を女性が占める。顧客からの問い合わせから、保険商品の契約、保険料の収納、保険金の支払いまで一貫して対応している。コールセンターのオペレーターは引っ切りなしに掛かって来る電話をとり、常に明るく丁寧に対応しなくてはならない。このため、オフィスには暖色を基調にしたカラフルなデザインを採り入れ、オペレーターのストレスを軽減する。また、オペレーター同士の顔が真正面から向き合わず、「互い違い」になるよう席を配置。ストレスを感じず、しかし孤独感も無いような工夫が凝らされている。

オペレーター出身の長崎カスタマーセンターの神谷麻紀センター長は「オペレーターの体調管理に最も気を遣う。家庭環境を把握した上で、顔色が優れなければ『早く帰りなさい』と声を掛けるよう努めている」と話す。このほか、事業所内に託児所を設けるなど、同社は働く女性を強力に支援する。総務・ベンダーマネジメント部総務室の緒方直樹室長は「オペレーターが少しでも快適に仕事ができるよう、オフィス環境には最大限の配慮を行う」という。



（一部修整あり）

「どんなに行政が旗を振り、企業誘致に成功を収めても、市民の間から起業マインドが生まれなければ地方は再生しないし、コンパクトシティも実現しない」―。そう考えながら歩いていると、民間の若い力で故郷を元気にしようという芽を長崎市内で見つけた。

熊井英哲さん（33）は静岡県内でバーテンダーの修行を積んだ後、「女性でも気軽に入れるような英国風パブを故郷の長崎市内で開店したい」と思い立ち、7年前にスコッチウイスキーの「聖地」である英国スコットランドに向かった。あいさつ程度の英語しか話せなかったが、小さな町の観光案内所で安宿を紹介してもらいながら、「アポ無し」で蒸留所を30軒以上も回って歩いた。スコッチの長い歴史を学び、製造現場をつぶさに観察しているうち、本場のパブでウイスキー論を展開できるほどの知識と英語力が身に着いた。

熊井英哲さん

2009年夏、長崎市内でバーを開いた後、JR長崎駅前に念願の英国風パブ「Mallaig」（マレイグ）をオープン。今では三店舗のオーナーである。熊井さんはこう確信している。「世界に通用するバーテンダーを一人でも多く育て上げ、店を持たせてやりたい。そうすれば長崎に独自のパブ文化が興り、愛して止まない故郷に恩返しができるはずだ」―。江戸時代以来の異文化に対する長崎市民の好奇心は健在であり、それが街の再生に大いに貢献するだろう。

（写真）筆者
PENTAX K-50使用

進化を続ける「ものづくり」 三条市（新潟県）／ 小田原市(神奈川県)

コンパクトシティが地方を救う（第４回）

社会構造研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　　中野 哲也

少子高齢化が加速し、財政事情も厳しさを増す中、地方行政の効率化は避けられない。各地の自治体がコンパクトシティ政策を推進・検討しているのもその一環である。ただし、それだけで地方が生き残れるわけではない。中心市街地を活性化しても、あるいは中心地と郊外の各拠点をそれぞれ効率化した上でネットワーク化しても、持続可能な産業がなければ都市は衰退してしまう。地方再生の主役はあくまで民の力であり、今回は伝統的な「ものづくり」を進化させることにより、生き残りを目指している三条市（新潟県）と小田原市（神奈川県）を訪ねた。

農閑期の鍛冶が「金物の街」に発展　三条市

新潟県の中央部に位置する三条市（人口約10.1万人）には、日本最長の信濃川のほか五十嵐川や刈谷田川が流れ、日本有数の稲作地帯をもたらした。半面、河川の氾濫で深刻な水害がたびたび起こり、農民は困窮していた。そこで江戸時代の代官が江戸から釘職人を招き、雪深い農閑期の副業として鍛冶を導入する。河川を活用した水運により、鍛冶関連の商業や物流も発展。三条は包丁や鋏（はさみ）など「金物の街」として繁栄し、今も真摯（しんし）な「ものづくり」が産業の大黒柱である。

創業1926年（大正15年）の諏訪田製作所を訪ね、匠（たくみ）の技を取材した。切れ味抜群の「高級爪切り」を主力に、「SUWADA」ブランドは海外でも卓越した評価を受ける。その秘密は「切れる」を極限まで追求する経営哲学にあった。工場の中では、84歳から20代まで老若男女の職人集団が黙々と作業を続け、その背中は独特のオーラを発する。三条鍛冶の伝統、あるいは職人の意地がにじみ出る。

仕入れた鋼材を1000℃以上で熱し、400トンという強大な圧力で叩き上げると、ようやく爪切りの刃に最適な材料に生まれ変わる。苦労して鍛造したのに、その七割を捨ててしまうほど、職人は材質にこだわり続けてきた。鍛造された材料は職人の手で何度も何度も削られ、50もの工程を経て一つの爪切りが出来上がる。

その命である刃は、極薄く慎重に仕上げたもの。「100分の1ミリの半分」という作業精度を実現できる手段は、熟練職人の「目」しかない。完成した爪切りはピカピカに磨き上げられ、最高級6万4800円の商品は「爪切りのロールスロイス」と呼ばれる。もはや「道具」の域を超え、「芸術品」の香りが漂う。

しかし、爪切り業界の頂点に立つまで、諏訪田製作所は茨（いばら）の道を歩んできた。三代目の小林知行社長（52）が父から引き継いだ20年前、日本経済のバブルは崩壊し、同社も多額の借金を背負っていた。何より経営が近代化しておらず、例えば同社には商品の希望小売価格の決定権がなく、全て問屋の言いなりだったという。

小林さんは「利益を確保できなければ、会社に明日はない」と危機感を募らせ、問屋の頭越しに小売店や最終ユーザーを一軒一軒歩いて回った。「いくらなら買ってくれますか」と尋ね、聴いた価格で売るようにしたのである。一方、問屋は面白くないが、確実に売れるから受け入れざるを得ない。同社は問屋を通すやり方を維持しながらも、次第に価格決定権を握れるようになった。

諏訪田製作所の小林知行社長

100円ショップで爪切りが買える時代、小林さんは逆転の発想で市場創造に取り組み、それに社運を賭けた。一つ1万円の爪切りを開発・投入したのである。その切れ味はプロから称賛され、国内のネイルサロンでは圧倒的なシェアを誇る。欧州でも評判になり、今や売上高のうち海外向けが2割に迫る。実は、先に紹介した6万4800円の「ロールスロイス」は一つ売れると30万円もの赤字なのだが、小林さんは「フラッグシップがあるからこそ、職人がヤル気を維持してくれる」と意に介さない。

小林さんは職人も含め社員50人が会社の決算書を読めるようにしており、「会社がどうやって利益を上げ、そのうち幾らが給料に回っているか」を叩き込み、一人当たり1000万円を超える売上高を確保している。その賃金制度は「上手な人が高く、下手な人は安い」という極めてシンプルなもの。小林さんの経営手法には、トヨタ自動車など巨大企業も引きつけられ、年間2万人が視察にやって来る。

スノーピークの本社敷地は東京ドーム4個分

三条市街から車で40分ほど進んでいくと、草木以外何もない山間に突然、瀟洒（しょうしゃ）な建物が現れた。キャンプ用を中心にアウトドア製品全般の開発・生産・販売を展開している、スノーピークの本社である。東京ドーム約4個分という大草原には、本社や工場、直営店、広大なキャンプ場が設けられている。スノーピークのブランドを愛して止まないファンが全国から集まり、大自然の中でキャンプを満喫する。

同社は、三条市で金物問屋として創業。登山家だった創業者はアウトドア製品を手掛けるようになり、オートキャンプブームを牽引した。その後も「焚き火台」などのヒット商品を生み出し、アパレル製品にも進出しながら、ブランド力の向上に努めている。三条で本社機能を維持しながら、東京と大阪に営業所を設けて取扱店を全国拡大中。海外展開にも注力し、米国や韓国、台湾に拠点を設置。2014年12月には東証マザーズ上場を果たした。

スノーピークの価格設定はライバル社に比べて高めともいわれるが、総務課マネージャーの大島秀俊さんは「当社のモットーは『感動品質』の追求であり、その反対が『失望品質』になる。付加価値が高ければ、値段が高くてもお客様は購入してくださると信じている」と話す。強風で簡単に吹き飛ばされてしまう安いテントでは、顧客のニーズを満たせないというわけだ。

「金物の街」という地の利もフルに活用している。キャンプでの調理に重宝なダッチオーブンでは、地元の鋳物成型技術を導入した「極薄鋳鉄」シリーズを開発。薄くて軽くても衝撃に強い。このほか、三条市内の業者に生産を委託するなど、スノーピークは地元との協調を重視している。

「カレーラーメン」が鍛冶職人の活力源

三条鍛冶は「カレーラーメン」というユニークな食文化も育んだ。70年余の歴史を誇り、今も市内では約70店舗が提供しており、昨今の粗製乱造のB級グルメとは一線を画す。チキン、ビーフ、カツ、激辛、さっぱり、汁無し、フルーツ、トマト、黒（竹炭）…。味や素材、スタイルは店によって様々である。この中で創業以来50年、「昭和の味」を守り続ける味方屋（あじかたや）で店主の佐藤博保さん（76）を取材した。

それにしても、なぜ三条でカレーラーメンなのか。以下のような説が有力らしい。鍛冶職人は汗だくの作業を強いられ、塩分補給を欠かせない。ところが、早朝から深夜まで働き詰めだったから、外食する時間はない。このため、塩分とカロリーを十分取れるカレーラーメンが考案され、職人が出前で注文するようになった…

佐藤さんは父から店を引き継いだ半世紀前、カレーラーメンを始めた。「普通のラーメンが一杯30～40円の時代、カレーラーメンは10円増し。鍛冶屋にとってはささやかな贅沢だったんだよ。辛いから夏でも食欲が湧くし、逆に雪深い冬は体が温まるしね。毎日毎日、出前の連続で本当に忙しかった…」ー

佐藤さんのカレーラーメンは正統派といえるだろう。調理場で秘伝のレシピを教えてもらうと、ラーメンスープは鰹節やニンニク、タマネギ、長ネギなど数十種類の食材で出汁をとっていた。一方、カレーソースは業務用ルーを使うが、大量のタマネギで甘みを出した上で、豚肉、ニンジン、ジャガイモを加える。隠し味はトマトケチャップと日本酒である。最初の一口は甘く感じるが、やがて「ピリッ」という辛さが口の中に広がる。

カレーラーメン一筋50年の佐藤博保さん

帰り際、「いつかまた寄らせてもらいます」と言うと、佐藤さんは「息子二人が東京と仙台で仕事しているんだ。店は今年いっぱいで閉めるかも…」―。「昭和の味」がまた一つ消えてしまうのか…

「脱下請け」中小企業に価格決定力を！國定市長

三条市の國定勇人（くにさだ・いさと）市長は42歳の若きリーダーである。郵政省キャリア官僚だったが、三条市役所出向時代にものづくりと大自然が共存する街に魅せられ、2006年の市長選に挑んだ。34歳で当選して全国最年少市長（当時）となり、既に3期目。家族とともに移り住み、豊かな自然とカレーラーメンをこよなく愛する。

三条市は元々、76㎢の面積に約8.4万人が暮らし、ものづくりを中心にコンパクトシティの性格が強かった。ところが、平成の大合併で旧下田町などと一緒になった結果、市域が432㎢まで一気に拡大した。人口は10万人程度にしか増えていないから、行政は効率性の面で課題を抱える。國定市長は「ものづくりのエリア、高齢化が加速する“まちなか”、自然に恵まれた過疎化地域をそれぞれ維持する。あえて『多極分散型社会の堅持』を打ちだし、それぞれの極がコンパクトになるよう目指していけば、その結果としてネットワーク型コンパクトシティの概念に近づくだろう」―

2008年のリーマン・ショック後、國定市長は三条の大黒柱であるものづくりに大きな疑問を抱いた。「自動車産業が冷え込むと、金属加工業を中心とするこの街の生産もパタッとストップした」からである。実はこれまで、地元経営者は「川上（＝取引先）は多種多様。一つが倒れてもほかが生き残っているから、中小企業は総体として地盤沈下することはない」と口を揃えていた。しかし、リーマン・ショックはそれが“都市伝説”にすぎないことを証明し、市長の期待は「見事なまでに裏切られた」―

國定市長は「自動車産業への依存度を下げて取引先を多様化し、同時に下請け構造からの脱却を実現しない限り、ものづくりに明日はない」と判断し、中小企業の再生を急いだ。とりわけ、諏訪田製作所が自力で実現したような「価格決定力」の確保である。「親元から「『景気が悪くて…』『為替が円高だから…』と言われてしまい、中小企業は値切り交渉で負けの連続だった」―

例えば、包丁メーカーが「屑のこぼれないパン切包丁」を開発するため、三条市は同社が受ける民間コンサルティングの費用を財政支援。その代わり、対象企業の財務状況や在庫管理などをオープンにし、その改善プロセスや成果を他の業者が共有できるようにした。「『一番星』を目指す企業はリスクをとっているのだから、その挑戦には正々堂々と公金を使う」―

ものづくりが抱えている閉鎖性や後継者不足といった問題を改善するため、國定市長は地元企業の製造現場を一般公開する「工場の祭典」を開くほか、子供向け職業訓練テーマパークを運営するキッザニアと連携して市内小中学生にものづくりを体験させている。「日本の理系は研究主体であり、技能を体系化して実学に昇華させている大学がない」と考え、「ものづくり大学」の創設も視野に入れる。

「総理大臣ではないから、『この街さえ生き残っていければよい』と割り切れることが、市長や地方行政という仕事の良さ。それぞれの市町村がこういう考え方をすれば、日本全体として前進できる」―。部分最適は全体最悪を招くと考えがちだが、課題設定と政策手段が妥当であれば、全体最適を実現できるかもしれない。閉塞感が強まる一方の政治や巨大組織の現状を打開する一つのヒントを、ものづくりの街で見つけることができた。

三条市の國定勇人市長

（写真）筆者
PENTAX K-50

再生可能エネルギーの“聖地” 小田原市

コンパクトシティに似た概念は、古くからこの国に存在していた。例えば、戦国～江戸時代の「城下町」である。領主の居城を中心とする防衛機能のほか、エリアごとに行政や商工業の施設が集まり、小さくても機能的で個性豊かな都市が形成されていた。その幾つかは今も当時の街並みを受け継いでおり、神奈川県小田原市（人口約19.4万人）もその一つ。武士や町人が活躍した時代の香りが漂い、歩いているだけで楽しくなる街である。

神奈川県の西部に位置する小田原市は戦国時代、北条氏の城下町として繁栄した。江戸から東海道を西進すると、箱根越え直前の宿場町となり、江戸時代に重要性が増す。今もJR東海道新幹線や東海道本線、小田急電鉄、箱根登山鉄道、伊豆箱根鉄道が乗り入れる交通の要衝である。山と海の幸に恵まれ、蒲鉾（かまぼこ）のほか、干物、梅干し、提灯（ちょうちん）、寄木細工など競争力の高い名産品も少なくない。

この街のシンボルは小田原城の天守閣である。北条時代、「難攻不落」と恐れられ、上杉謙信や武田信玄の軍勢を跳ね返した名城。現在の天守閣は1960年に復元されたものだが、その優美な姿は武士の誇りを映し出している。また、市内の見る場所によって、あるいは時刻によって受ける印象が変わり、城マニアでなくても何度でも見たくなる天守閣である。

創業150年の鈴廣「老舗にあって老舗にあらず」

今年で創業150年の鈴廣かまぼこは、小田原を代表する蒲鉾の老舗（しにせ）。市内風祭に「かまぼこの里」を建設。本社、工場のほか、手づくり体験コーナーを併設するかまぼこ博物館、古民家風のレストラン、ありとあらゆる蒲鉾を扱う売店などが集積する。蒲鉾のテーマパークのような趣であり、取材当日は平日にもかかわらず、観光客が朝から詰め掛けていた。

「老舗にあって、老舗にあらず」―。これは鈴廣の揺るぎない社是である。同社の代表取締役副社長で小田原商工会議所会頭も務める鈴木悌介（すずき・ていすけ）氏にその意味を解説していただいた。

（1）150年前も今日も変わらないのは、鈴廣のかまぼこを召し上がりたくて、お金をくださるお客様がいらっしゃるということ。お客様のいない商いは存在しないし、お客様や世の中の役に立つからこそ商いは存在を許される。
（2）「老舗にあって」＝どんなに時代が変わっても、商売には変えてはいけないものがあり、頑固に守り抜いていく。それはお客様の真正面を向いて仕事をする姿勢である。
（3）「老舗にあらず」＝その一方で、勇気をもって変えなくてはならないものもある。お客様の嗜好や技術革新、自然環境、原料事情などの変化を見極め、仕事のやり方はどんどん変えていく。変えていかないと、本来守るべきものを守れない。
（4）「老舗にあって」と「老舗にあらず」は50%ずつバランスを取るのではなく、両方とも欲張りに100%を目指して商売する。

鈴廣の新社屋（建設中）と
鈴木悌介代表取締役副社長

世の中の大半の企業が「顧客志向」を標榜しているが、実際には供給側の論理が優先してしまい、掛け声倒れに終わっているケースも多々ある。しかし、鈴廣の社是は蒲鉾一筋で150年の歴史という結果を出しており、説得力がある。しかも、「お客様第一」という究極の目標を実現するために、古いやり方に固執することなく、常に新しいものを採り入れている。伝統を守りたいからこそ、「創造的破壊」に絶えず挑んできたのだろう。

例えば、鈴廣は現在、蒲鉾に保存料や化学調味料を一切使用していない。工場内や従業員の衛生管理を徹底することにより、保存料を使う他社製品に劣らない日持ちを実現できたからである。鈴木氏は「食う」という行為を、「人間の身勝手な理由で生き物の命を使うこと」と定義する。だから、「日本人は食事の前に『（あなたの命を）いただきます』と感謝の言葉を発する」―

また、鈴木氏にとって食品産業とは、「生き物の命をお客様に移し替えること」である。このため、「命を捻じ曲げたり、歪（いびつ）にしたりしてはいけない」―。そう考えると、確かに保存料などは使えなくなってしまう。

さらに、鈴木氏は「食」という漢字を「人」を「良」くすると分解し、「食べ物を口にする人が健康になってもらい、幸せになってもらうことこそ食品産業の使命」と確信している。出張以外は必ず毎日20～30種類の自社製品を味見し、鈴木氏は微妙な変化がないか確認する。「味づくりは毎日が勝負です」 ―

今夏竣工の新本社　エネルギー消費量を54％削減

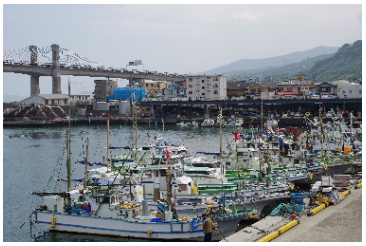
鈴木氏独自の経営哲学は食にとどまらず、対象をエネルギーの領域にまで拡大する。東日本大震災と東京電力福島第1原発事故を受け、同氏は日本のエネルギー政策について「これはヤバイ」と痛感した。また、計画停電によって鈴廣も15％節電が義務付けられ、蒲鉾というナマモノを生産する同社に死活問題が発生する。

しかし、鈴木氏は危機を好機ととらえ、「原発に依存しなくてよい水準まで節電しよう」と決断。10の製造ライン（5日操業、2日休業）を7つに減らし、週7日間フル稼働させた。それにより生産量を維持しながら、ピーク時の電力使用量を引き下げたのである。また、レストランの空調設備には井戸水と地中熱を使うシステムを導入。真夏に35℃になる外気を井戸水の中に通し、25℃程度にまで冷やす。逆に、冬は外気を地中熱で温める。結果、空調の負荷を大幅に軽減することができた。

こうした企業努力により、鈴廣は電力の原発依存度（東日本大震災前）に匹敵する20～25％の節電を実現した。今年8月竣工予定の新本社ビルでは井戸水の活用に加え、断熱壁や二重窓ガラス、自然光の活用など節電対策を一層強化し、エネルギー消費量の54％削減を目指している。

日本商工会議所青年部会長を歴任した鈴木氏は、全国の中小企業経営者をつなぐネットワークを築いている。それを利用しながら2012年3月、再生可能エネルギーによる地域のエネルギー自給体制の確立などを目指す「エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議」（エネ経会議）を旗揚げし、代表理事に就任した。地元の小田原市では「ほうとくエネルギー」という発電会社を設立。メガソーラーのほか、小学校の屋根などを借りてソーラー発電を始めている。

「エネ経会議」の会員は350人に増え、「ほうとく」のような地産型の発電会社も全国で60を数える。ただし、鈴木氏は「原発は不要。だが、単なる反対運動はしない」と語る。危機に対して脆弱な中央集権型ではなく、分散型のエネルギー社会の実現が目標なのである。取材中、鈴木氏の口は”機関銃”になり、アイデアを次々に発していた。だが、それを実現してしまう行動力こそが最強の武器であり、最大の魅力である。創造的破壊によって「老舗にあって、老舗にあらず」という社是をしっかり守りながら、鈴廣は創業200年に向けて歩み出した。



（写真）筆者
PENTAX
K-50

サハリン交流に懸ける最北端の街　稚内市（北海道）
コンパクトシティが地方を救う（第５回）

産業・社会研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　中野 哲也

今年8月半ば、記録的な猛暑が続いていた東京を飛びだし、宗谷岬（北海道稚内市）を目指した。現地に着くと寒暖計は16度を示していたが、強風が吹きつけてくるから、体感温度はもっと低い。日本が実効支配する国土では最北端に位置するため、真夏でも肌寒いわけだ。海の向こう側には大きな島、すなわちロシア領サハリン（旧樺太）が浮かんでいる。その間わずか43キロ。サハリンは歴史上、日露両国の威信と権益と武力が衝突する舞台となり、日本側の「玄関口」である稚内も翻弄（ほんろう）されてきた。

樺太を「島」と確認した間宮林蔵

19世紀初め、欧米各国が植民地政策を展開する中、徳川幕府はロシアの南下を恐れていた。しかし、幕府は自らの鎖国政策によって情報流入を極端に制限していたから、ロシアに関する知識に乏しい。正確な地図がないため、領土や領海の境界もはっきりしない。例えば、古くから樺太の存在は知られていたものの、それがユーラシア大陸につながる「半島」か、あるいは切り離された「島」なのか―。激しい論争が起こっていた。

このため、幕府は間宮林蔵らに樺太を探検するよう命じた。間宮は農家に生まれたが、算術や測量の特異な能力を見いだされ、厳格な身分制度の時代にもかかわらず、幕府の下役人として抜擢されていた。間宮は後に日本全図を作成した伊能忠敬に測量技術を学んだ上で、幕府隠密として稚内から樺太へ渡航する。ロシアに決して察知されてはならない極秘の探検だった。

氷点下の厳しい寒さと未知の大自然に対する恐怖を乗り越え、間宮は1809年に樺太縦断に成功。それが「島」であることを確認し、論争に終止符を打った。だから、世界地図ではユーラシア大陸とサハリンの間の海が「間宮海峡」と記されているのである。

「これが最後です。さようなら、さようなら…」

樺太とその周辺海域は水産物や鉱物の宝庫と目されていたから、日露関係にはたびたび軋轢（あつれき）が生じた。ようやく1875年に交換条約が締結され、ロシアが樺太を編入する一方で、日本は千島（ちしま）を領土とする。しかし、日露戦争で明治政府が勝利を収めると、樺太は南北で分断され、日本は北緯50度以南の南樺太を獲得した。鉄道が敷かれて鉱工業や漁業が発展し、南樺太の人口は最盛期に40万人を突破。同時に、稚内はその「玄関口」となり、資機材の供給基地として急速に発展を遂げた。

ところが、ソ連は太平洋戦争末期の1945年8月8日、日ソ中立条約を一方的に破棄した。南樺太に侵攻し、罪なき命を奪い続ける。郵便局で電話交換に従事していた若い女性9人は最期まで職場を離れず、ソ連兵が迫り来る中、「皆さん、これが最後です。さようなら、さようなら…」―。全員が青酸カリを服毒して自決したのは、終戦から既に5日が過ぎた8月20日のことだった。

戦後のサンフランシスコ講和条約によって、日本は南樺太の領有権を放棄した。ただし、ソ連が署名しなかったため、日本政府は南樺太の帰属について国際法上「未確定」の立場をとるが、今もロシアがサハリン州として実効支配を続けている。

日本の南サハリン放棄とともに、戦後の稚内は「玄関口」の機能を喪失した。だが幸い、日本海とオホーツク海に挟まれ、豊かな漁場に恵まれていた。戦後、稚内は北洋漁業の基地となり、ニシンやサケ、マス、タラ、カニなどを大量に水揚げする、国内有数の漁業の街として栄えるようになる。

ところが、ソ連が1975年に200海里漁業専管水域の設定を宣言すると、北洋漁業は壊滅的な打撃を受けた。止むなく稚内の漁業関係者はソ連からのカニ輸入に生き残りを懸ける。しかし、ソ連がロシアに変わると、今度は資源保護政策が厳しくなり、再び稚内漁業は窮地に追い込まれた。街は衰退して過疎化との戦いが始まり、人口は最盛期の5.5万人から今では3.6万人まで減っている。

対サハリン「草の根外交」に踏み切った稚内市

宗谷海峡を挟んで大国ロシアと対峙する地勢は稚内の宿命であり、それが最北の街を翻弄してきた。そこで街の人々は発想を転換し、目と鼻の先に浮かぶサハリンを「経済資源」として活用しようと考えた。

前述したように、ソ連がサンフランシスコ講和条約に署名せず、日本とロシアは未だに平和条約を締結していない。一方、稚内市はサハリンとの文化交流に踏み切り、1972年にネベリスク市と友好都市協定を結んだ。今ではコルサコフ、ユジノサハリンスク両市とも友好都市であり、国家レベルとは別の次元で「草の根外交」を独自に推進している。サハリンとの交流は経済分野に拡大し、その象徴である定期航路のフェリーが夏場、稚内～コルサコフ間を5時間半で結んでいる。

稚内市（北海道）

稚内の街中を歩けば、道路標識や店の看板などにロシア語の表記が目に付く。市内唯一のロシア料理店「ペチカ」を訪ねると、サハリン出身の女性シェフが腕を振るっていた。彼女は「北海道の新鮮な食材を使い、サハリンの家庭料理と全く同じ味を再現できる」と自信を示し、市民もボルシチに舌鼓を打つ。日本で最も身近にロシアを感じられる街、それが稚内である。

ただし、稚内市のサハリン交流政策は必ずしも順風満帆というわけではない。市のサハリン課によると、サハリン大陸棚の石油・天然ガス開発（サハリン・プロジェクト）の最盛期には、定期船の年間輸送量が貨物約7000トン、旅客約6000人に上った。しかし、今ではそれぞれ1000トン弱、約4500人まで減っている。このため、稚内市は市内に2泊以上するサハリンからの来航客に対し、フェリー運賃4万円のうち1.5万円を補助。また、市内の業者がサハリンに輸出する際は、1件当たり5万円を支給するなど、交流拡大を積極的に支援している。

稚内市の粘り強い努力が実を結び、サハリン交流の経済効果は年間3億円を超える。しかし、定期船を運航していた民間業者が撤退を表明するなど、先行きは予断を許さない。市は第3セクター方式で定期船を存続させるとともに、首都圏などでのサハリン航路の知名度アップを目指し、PR活動を強化する方針だ。

サハリン交流の旗振り役を務める稚内市の工藤広市長は、毎年のように現地を訪れ、独自の人脈を築き上げている。最近はロシア人の日本食に対する関心をひしひしと感じており、「スイカやメロン、タマネギといった農産物の輸出が期待できる」と話す。

稚内市の工藤広市長

お年寄りが歩いて生活できる駅再開発

人口が3.6万人まで減少した稚内市だが、市域は761㎢に達する。面積は仙台市（宮城県）とほぼ同じで、人口は30分の1に過ぎない。1970年代、市主導で郊外に団地が造成される一方で、中心部が空洞化する「ドーナツ現象」が加速した。しかし、お年寄りは郊外には住みづらくなり、市は高齢化に対応した街づくりへの転換を図り、その切り札としてエリアごとにコンパクトシティの実現を目指している。

例えば、中心部の再開発で誕生した「キタカラ」にはJR稚内駅や道の駅、バスターミナルのほか、市内で22年ぶりに復活した映画館、飲食店、物販店、コンビニなどが集積。さらに、高齢者向けのグループホームやサービス付き住宅も併設されており、工藤市長は「北海道は国内有数のクルマ社会だが、お年寄りが歩いて生活できるエリアを実現した」という。

市内には日本最北端の宗谷岬をはじめ、夕日が素晴らしいノシャップ岬、70本もの円柱が連なる北防波堤ドーム、海抜240メートルの開基百年記念塔…。予想以上に見所が多いし、もちろん随所で新鮮な海と山の幸を存分に楽しめる。

工藤市長はこうした観光資源で交流人口の拡大を目指す一方で、「環境の稚内」も売り込んでいる。一年中強い風が吹きつける稚内は「風力発電の最適地」とも指摘されており、氷河期に形成された宗谷丘陵には国内最大級の風車群がある。また、東京ドーム約3個分の敷地に太陽光パネルを敷き詰めたメガソーラー発電所も稼働している。

風車は増設が予定されており、再生可能エネルギーだけで市内の電力需要を賄える計算になる。また、近隣地域への電力供給に向け、国に働き掛けて送電網の整備も進める。工藤市長は「企業には稚内を環境技術の研究開発に活用してもらい、将来は環境関連産業の集積地を目指したい」と期待している。

日本の未来の担い手は子供たち。それなのに全国で少子化に歯止めが掛からず、稚内市もその例外ではない。しかし、この街は市民ぐるみで取り組む「子育て運動」を展開し、たくましい子供たちを育て続けている。その中で生まれたものに「南中ソーラン」がある。アップテンポに編曲した民謡「ソーラン節」に合わせ、子供たちがチームを組んで熱く激しく踊るのだ。

8月22日、市内の公園では南中ソーラン全国交流祭が開かれ、幼児から小学生、中学生まで約1500人が自慢の踊りを披露した。小中合わせて15人しかいない学校は、中学生が小学1年生を優しく導きながら、心を一つにして踊りまくる。離島から駆けつけた日本最北の中学校の生徒は、EXILEのようにカッコ良く演じ切り、観衆から喝采を浴びていた。子どもたちは皆、一心不乱に南中ソーランを踊りながら、「遠い、寒い、雪が多いというハンディキャップ」（工藤市長）を吹き飛ばすパワーだ。その真剣な顔はどれもキラリと光り、無限の可能性を感じた。

（写真）筆者
PENTAX
K-S2使用

「龍馬」こそ最強コンテンツ　高知市（高知県）
コンパクトシティが地方を救う（第6回）

産業・社会研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　中野 哲也

太平洋に臨む高知市・桂浜。荒波が岩礁に激突するたび、純白の飛沫（しぶき）が宙を舞う。その先には青い海原が果てしなく広がり、水平線が地球の丸さを証明するだけ…。しかし、この幕末の志士には「何か」が見えていた。坂本龍馬は歴史の偶然と必然の間を全力で疾走し、近代日本の起点となる大政奉還を実現した。だがその直後、京都で暗殺されてしまう。33年間の生涯はあまりに短く劇的であり、謎にも包まれている。時空を超えて輝き続けるアイコンとして、龍馬は今なお日本人の心をつかんで離さない。

龍馬が生まれ育った高知市には一年中、国内外のファンが押し寄せている。まるで巡礼者が聖地を訪れるかのように…。だから、この街は龍馬を「キラーコンテンツ」として最大限に活用する。冒頭の桂浜をはじめ、高知龍馬空港やJR高知駅、商店街など至る所で、「龍馬」が来訪客を出迎える。生誕地では市が「龍馬の生まれたまち記念館」を運営し、日本郵政は「龍馬郵便局」を営業する。高知県も桂浜に「坂本龍馬記念館」を開設し、「リョーマの休日」と名づけた観光キャンペーンを展開している。

歴史上の人物に対し、行政がこれほど関与するケースは珍しい。高知市の岡﨑誠也市長も「高知県外の方からは、『龍馬に頼り過ぎではないか』と怒られますが…」と苦笑する。だが、看板を降ろす気は毛頭ない。「歴史上のヒーローはたくさんいるが、常に若いファン層の再生産が続いているのは龍馬だけ。いつの時代も『龍馬大好き！』という子供はたくさんいるが、『織田信長が好きや』という子は…。姉から可愛がられて育った龍馬の本質は家族愛にあり、それを子供は本能的に分かるのではないか」―

岡﨑誠也・高知市長

「酒は呑むべし」の市民性でグルメ王国に

市内を歩き始めると、この街の人々が龍馬に限らず、歴史をこよなく愛し、大切にしてきたことに気づく。高知城は天守閣や追手門といった本丸の構造物が、江戸中期に再建された姿のままで保存されている。追手門からの路上では1.3キロにわたり、300年以上の歴史がある「日曜市」が毎週開かれる。終日営まれる路上市としては国内最大。400店超がテントに入り、毎回約1.5万人を集める。季節の野菜・果物・海産物から、骨董品、植木、金魚まで、「人間以外、全てのものを売っている」といわれる品揃えだ。

高知城の追手門と天守閣

山内一豊像

「酒は呑むべし」という龍馬の教えを守り、高知の人は実によく飲む。岡﨑市長が「儲かってもすぐ飲んでしまい、蓄財しない市民性」と解説するほどだ。中心部にある「ひろめ市場」は和食・洋食・中華の店から好きなものを注文できる、巨大なフードコート。地元の人に観光客が加わり、昼間から「乾杯！」一。人懐っこい土佐っ子は、見知らぬ者ともすぐ仲良くなる。

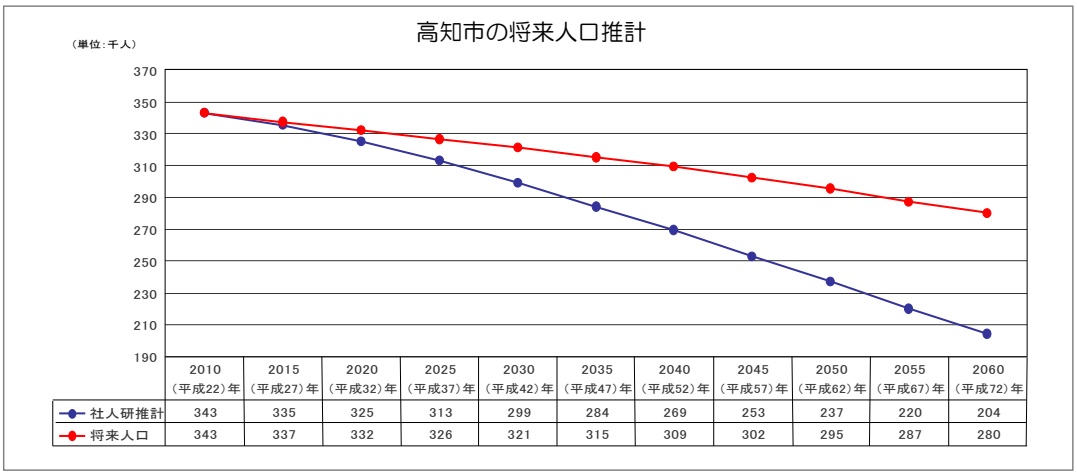
藁（わら）で豪快に焼き上げられたカツオのタタキは実に香ばしい。すっきりした口当たりの地酒がぐいぐい進んでしまう。魚に限らず、鳥料理や屋台ギョウザ、市民のおやつ「帽子パン」など、味覚水準の極めて高いグルメ王国なのである。

移住事業で28万人死守！中山間部に「一貫校」

高知市の人口は33.8万人に達し、県内人口（73.1万人）の46%が集中する。県内第2位の南国市（4.8万人）の7倍であり、日本の地方都市では仙台市（宮城県）や京都市（京都府）などと並んで典型的な「プライメイトシティ」（2位以下を大きく引き離す一極集中型の都市）といわれる。

しかし、プライメイトシティの高知市であっても、少子高齢化の荒波からは逃れられない。国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の推計によると、市の人口は2010～2060年の半世紀に34.4万人から20.4万人まで激減し、岡﨑市長は「推計通りならば、経済も社会保障も維持できない」と危機感をあらわにする。

このため、高知市は2060年の目標人口を28万人に設定し、それを死守するため、独自の政策を積極的に展開している。その三本柱が、①合計特殊出生率の上昇（2013年1.46→2019年1.60→2035年2.07）②死亡率の改善③転出超過の抑制・移住の促進一である。社人研の推計20.4万人＋①4.4万人増加＋②0.7万人増加＋③2.4万人増加≒28万人という計算になる。



	2010（平成22）年	2015（平成27）年	2020（平成32）年	2025（平成37）年	2030（平成42）年	2035（平成47）年	2040（平成52）年	2045（平成57）年	2050（平成62）年	2055（平成67）年	2060（平成72）年
社人研推計	343	335	325	313	299	284	269	253	237	220	204
将来人口	343	337	332	326	321	315	309	302	295	287	280

（提供）高知市

①の具体策として高知市は全国の県庁所在地で初めて、第二子の保育料の無償化に踏み切った。年間3億円近くもかかり、市にとって小さな額ではない。しかし、岡﨑市長は「親の経済負担が大きいから、子供が増えない。本来は国がやるべきだが、やってくれないので先行して取り組んでいる。そのうち、国が追いついてくるのではないか」と指摘する。②に関しては男性の死亡率を全国平均レベルまで改善し、「子供から高齢者まで暮らしを支援する街づくり」を推進している。

③では移住事業が非常にユニークである。子育て世帯の移住を促すため、中山間地域に小中一貫教育校「土佐山学舎」を開校。通常の6・3制ではなく、4・3・2制（前期＝夢を描く、中期＝自分を見つめる、後期＝道を拓く）を採用し、前期1年生（＝小1）から英語を習い、後期9年生（＝中3）で英検2級（高校卒業程度の英語力）の合格を目指す。電子黒板やタブレットをフル活用する一方で、中山間地域の地元住民が学校運営に参画する。市街地から通う生徒のため、スクールバスも用意した。全校生徒98人で発足後、予想以上の人気を博し、地域外の子供の入学は抽選になった。今春130人前後まで増やし、将来は200人規模を目指すという。

この小中一貫教育に注目が集まり、「土佐山学舎」周辺の空き家はほとんど無くなった。そこで高知市はこの地域に市営住宅を10戸建てたが、すぐ満室になり、2016年度に増設する予定。また、中山間地域への移住希望者を対象に、市は体験滞在施設「しいの木」も開設した。1室1泊1080円（最初2泊は各3240円）で最長6カ月借りられる「お試し住宅」である。ここを生活拠点として地域住民と交流を重ねた上で、移住を決断できる。昨夏オープンしたばかりだが、施設の稼働率は60%を超える。

高知市は2014年4月に移住・定住促進室を設け、この事業に本腰を入れた。子育て世代のほか、世界各地を転戦してきたプロサーファーや和紙・染物の職人など、多彩な人材を引きつけており、昨年度だけで112組（118人）が市内に移住した。向こう3年以内に年間200組（400～450人）の移住を実現し、人口減を少しでも食い止めようと懸命な努力を続けている。

高知市の対策は創造性に富み、レベルが非常に高い。自治体としては精一杯だと思う。だが前述した通り、それでさえ50年間で6万人も減ってしまう。となると、ある程度の人口減を前提として、一人当たりの生産性をいかにして高めていくのか。従来発想の延長線上では対処できず、この国の社会システムを土台から改革しなくてはならない。自治体や地域の自助努力だけでは、もはや限界ではないだろうか。

日本最古の路面電車は危機を乗り越えたが…

少子高齢化が加速する中、多くの自治体が行政コストの削減を目指し、コンパクトシティ政策に着手した。その点、高知市は地勢上の優位性がある。東西に細長い平野部に、人口の9割が集中するからだ。また、土佐藩主の山内一豊が江戸時代初期、コンパクトな城下町づくりを進めたこともあり、その遺産も受け継いで中心部の活性化に取り組む。今、市と高知県は共同で図書館などの複合施設「オーテピア」を建設中であり、岡﨑市長は「完成後は中心部への人口回帰が加速する」と期待を寄せている。

西浜の夕暮れ（A-HDR撮影）

市内には、欧州のコンパクトシティでは重要な路面電車も健在だ。この「とさでん交通」には、現存する国内の路面電車で最古の歴史（1904年開業）、最長の軌道線（25.3km）、逆に最も短い停留所区間（63m）、国内や欧州の各都市から譲り受けたクラシックな車両群がある。鉄道ファンでなくても魅力にあふれる。最大の繁華街「はりまや橋」を中心に、市街地を十字型に横断・縦断する。

はりまや橋から後免町（ごめんまち）行きに乗ると、電車のモーターが「ブウーン」という懐かしい唸（うな）り声を上げ、「ガタン、ゴトン」と動き出した。途中、清和学園前で下車すると、一つ先の一条橋は目と鼻の先。まるで「おもちゃの国」にいるような気分だ。ここが日本で最も短い「駅間」であり、63メートルしかない。慢性運動不足の筆者でも、走れば十数秒？でも、この停留所があるからこそ、地元の中高生は安心して毎日通学できる。

※清和学園前に停車中の電車を一条橋から撮影

実は、路面電車を運行していた土佐電気鉄道は業績不振に不祥事が重なり、危機に陥っていた。結局、高知県や高知市、沿線自治体が出資し、同社と路線バスの高知県交通などを統合した上で、2014年10月に「とさでん交通」が発足した。

日本最古・最長の路面電車は危機を乗り越えたが、前途は決して楽観できない。岡﨑市長は「病院や買い物に行くお年寄りや、通学生の足を確保するため、路面電車は絶対に残さないといけない」と言い切る。その一方で、「運営は民間のままでも、資本は全て税金になった。人口が減っていく中で、経営の効率化と『住民の足を守る』という使命をいかに両立させていくか…」と難しい課題も認める。

路面電車はカラフルな企業広告を車体に掲載し、少しでも収益を上げようと必死に走っている。筆者の乗車中、運転士は下車するお年寄りに「（降りた後）クルマ見てね～」と注意を促したり、土地に不案内な客には「〇〇ホテルは（路面電車より）タクシーのほうが便利ですよ」と助言したり…。おもてなしの精神が根づけば、「とさでん」は国内外からの観光客にも愛されるだろう。

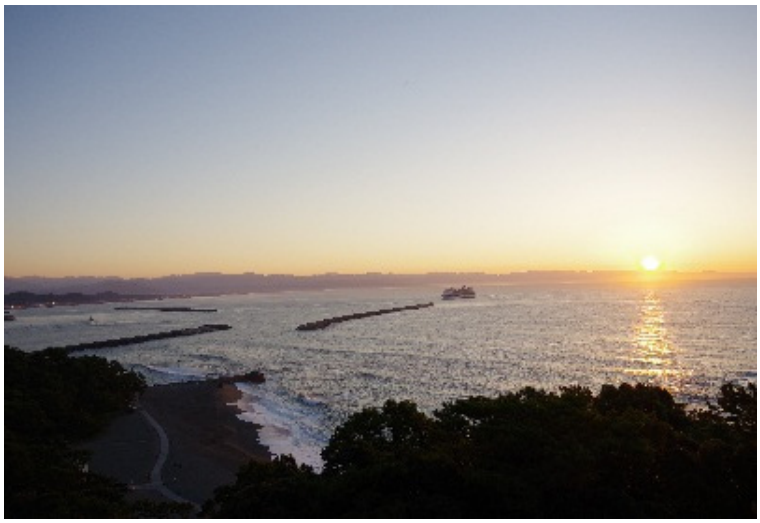
300年以上の「魚の棚商店街」でも後継者難

路面電車で中心街に戻り、木製アーケードの美しい「はりまや橋商店街」から路地に入る。すると、時計の針が逆戻りしたような空間が広がっていた。この「魚の棚（うおのたな）商店街」は道幅3メートル、長さ100メートルほどの小さな買い物通り。江戸時代初期、山内家から特別な許可を得て日除けのための庇（ひさし）を導入し、魚などを並べて売り始めたという。それから300年以上、庶民の台所として親しまれてきた。

「土佐干物」を扱う岡本海産物店は終戦直後の創業。店主の西村和子さん（71）は「昭和30年代、私が学校から帰って来ても、お客さんが一杯で店の中に入れなかったのよ…」と振り返る。人通りはめっきり少なくなったが、今でも西村さんは朝8時～夜7時まで店先に立つ。週3回は朝4時起きで、市場まで仕入れに行くという。しかし、伝統ある商店街でもシャッターが一つ、そしてまた一つ閉まっていく。「向かいの魚屋さんはご主人が亡くなり、店を閉めちゃった。うちも後継ぎがいないから…」―

後継者問題は商店街に限らず、農山漁村や中小工場など全国のあらゆる分野で深刻化している。コンパクトシティをつくっても、ショッピングセンターやコンビニが主役を務めるなら、日本の街は「金太郎飴」と化して個性と輝きを失う。手遅れになる前に政官民で英知を振り絞り、難題の解を見つけなくてはならない。幕末、龍馬は幕藩体制の破綻を見抜き、「ニッポンを今一度せんたく（洗濯）いたし申し候」と最愛の姉に誓った。もし現代に蘇ったとしたら、きっと同じ台詞（せりふ）を吐くに違いない。

岡本海産物店の
西村和子さん



桂浜の日の出

（写真）筆者
PENTAX
K-S2使用

生物と人の多様性「東洋のガラパゴス」 奄美市（鹿児島県）
コンパクトシティが地方を救う （第７回）

産業・社会研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　中野 哲也

鹿児島空港から南西へ約400キロ、約1時間で奄美大島に到着した。ちょっと歩くと、タイムカプセルで保存されているかのように、太古からの自然が手付かずで残されたまま。この地域にしか生息していない動植物が数多く、「東洋のガラパゴス」と称される。また、「シマ」と呼ばれる集落が島内に点在し、個性豊かな文化を築いて守り続けている。生物も人も「多様性」を最大限に尊重しながら、奄美市（人口約4.4万人）は少子高齢化時代に立ち向かう。

奄美市の中心・名瀬地区

サンゴ礁の美しい土盛海岸

あやまる岬から太平洋を望む

支配者が変遷　按司～琉球～薩摩～米軍～日本復帰

「あまみ」は1300年を超える長い歴史を持ち、日本書紀の657年の項に「海見（あまみ）島」という記述を確認できる。大化の改新（645年）の頃、既にこの地域は独特の海洋文化を築いていた。中でも、サンゴ礁に棲むヤコウガイ（夜光貝）は真珠のようにキラキラと輝き、奈良や京都の貴族に珍重されたことから、本土との貿易が拡大した。また、遣唐使が日本～中国を往復した航路のうち、南島路は奄美大島を経由した。中国の僧、鑑真（がんじん）もこの航路を使い、両眼失明という苦難を乗り越えて日本へ渡って来た。

古代、奄美大島では按司（あじ）と呼ばれる首長が群雄割拠し、それぞれが集落を治めながら、貿易商人としても活躍した。中央集権の必要な農業ではなく、貿易が経済の柱だったため、島全体を統一する王や政権は登場しなかったらしい。ところが、尚巴志（しょうはし）が琉球（沖縄）を統一すると、奄美大島へ侵攻してきた。征服された奄美は15世紀半ば～17世紀初めの約150年間、琉球王国の支配下に入る。

中国との貿易で繁栄していた琉球王国に対し、島津氏の薩摩藩が出兵する。1609年、その途中で奄美大島を征伐し、事実上の直轄地として治めた。薩摩藩は巨額の借金を抱えて財政危機に陥り、奄美大島の農民にサトウキビ栽培・黒糖生産を強制し、厳しい搾取を続けた。薩摩から赴任・監視する役人と少数の大土地所有者の下で、家人（やんちゅ）と呼ばれる人々が奴隷のように働かされていた。

奄美料理を代表する「鶏飯」（けいはん）は当時、薩摩役人をもてなすために作られたという。なお、西郷隆盛は幕末の一時期、薩摩藩に命じられて奄美大島に潜居し、島妻の愛加那（あいかな）との間に二人の子供をもうけている。

奄美料理を代表する「鶏飯」

「ハリセンボンのから揚げ」も…居酒屋「若大将」の大郷夫妻

伝統を守る手作り黒糖（水間黒糖）

西郷隆盛の上陸碑

島内に点在するサトウキビ畑

明治維新に伴い、奄美大島が鹿児島県の一部になった後も、島民は貧しい生活を余儀なくされた。第二次大戦終戦の翌1946年、米軍は北緯30度以南の奄美大島や沖縄などを統治下に置き、日本本土との渡航を全面禁止。奄美大島では食料品や日用品が絶対的に不足し、島民はやむなくソテツの実などで飢えをしのいだという。

にもかかわらず、米軍政府はインフレ対策を名目に配給食糧の三倍値上げを指令した。このため、14歳以上の島民の実に99.8%が本土復帰を求めて署名し、集団断食など命懸けの運動を展開。それに折れる形で、ダレス米国務長官が1953年8月に奄美大島の返還を表明し、ようやく同年12月に日本復帰が実現した。

「奄振」で2兆円超投入、インフラは整備したが…

日本復帰を果たしたものの、当時の奄美大島は疲弊・荒廃しており、戦後復興が進む本土との経済格差が著しく開いていた。このため、国は1954年に奄美群島復興特別措置法を制定し、奄美地域と本土の格差是正に乗り出す。5年間の時限措置だったが、延長に次ぐ延長で今に至っている（現在は奄美群島振興開発特別措置法＝奄振）。この奄振に基づいて、奄美群島には公共事業に対する国の補助率かさ上げや税制上の優遇措置などが講じられ、これまでに2兆円以上が投入された。

おかげで空港や道路、港湾などのインフラ整備が急速に進んだ。1972（昭和47）年に沖縄が本土復帰するまでは、奄美群島が事実上の「日本最南端」観光地だった。ベテランのタクシー運転手に聞くと、「関西方面から新婚旅行客などが詰め掛け、昭和40年代が最も忙しかった」と懐かしそうに振り返った。

ところが、奄振は強烈な副作用をもたらした。奄美群島で日刊紙を発行している南海日日新聞社の松井輝美・常務取締役編集局長は次のように指摘する。「島民が奄振に慣れ切ってしまい、補助金で食いつなぐ経済になってしまった。しかし、どんなに補助金を投じても伝統産業は衰退する一方で、新たな地場産業が興らない。若者は島外に職を求め、人口流出に歯止めが掛からなくなった」ー

創刊70周年の南海日日新聞社

伝統産業の大黒柱が、1300年余の歴史を誇る高級絹織物の大島紬（おおしまつむぎ）。だが、着物文化の衰退や安価な輸入紬の流入に伴い、壊滅的な打撃を被った。大島紬の生産額は1980年に286億円を記録したが、今では数億円でしかない。

本土復帰当時に20万人を超えていた奄美群島全体の人口も現在、12万人を割り込んでいる。奄美市名瀬末広町の永田橋市場ー。軒先で島ラッキョウの皮を剥きながら、泰多江さん（89）は「昔はここも活気があったんだよ。でもね、若い人が島から出て行ってしまい、人通りがなくなっちゃった…」ー

高級絹織物の大島紬

永田橋市場を守り続ける
泰多江さん（右）と
小俣菊栄さん（左）

奄美では公共事業に対する国の補助率が手厚いとはいえ、地元自治体は一定額を負担しなくてはならない。インフラ完成後は、補修費用の負担も重く圧し掛かってくる。その結果、自治体の借金が増えて財政は著しく悪化し、マスコミは奄美市を「（財政破綻した）第二の北海道夕張市」と形容した。奄美大島の支配者は琉球王国、薩摩藩、米軍と移り変わり、日本復帰後も「補助金で『霞が関』に支配されてきた」（鹿児島県地方自治研究所「奄美戦後史」南方新社）という指摘もある。

元々、奄美大島（本島）は名瀬市、笠利町、住用村、龍郷町、瀬戸内町、大和村、宇検村の1市3町3村に区分されていた。このため、国は「平成の大合併」で再編を促した。しかし、町や村の名前が消えることには激しい抵抗もあり、紆余曲折を経て結局、名瀬市、笠利町、住用村だけで飛び地合併し、2006年に奄美市が誕生した。

旧1市1町1村の起債残高は2006年度の561億円から、2014年度は505億円まで9％減少。職員数も2006年度の714人から、2015年度は16％減の602人にスリム化した。「痛み」を乗り越えて、合併が行政コストの削減効果をもたらしたことは間違いない。その一方で、総人口は合併時の約4.8万人から10年間で一割強減っており、人口減少には歯止めが掛かっていない。

奄美市名瀬地区の
中心商店街

奄美地域の今年4月の有効求人倍率は0.69倍であり、職を求める100人に対して69人分の仕事しか提供されていない。東京の2.02倍、全国平均の1.34倍に遠く及ばす、鹿児島県全体の0.97倍とも大きな格差が生じている。雇用創出は喫緊の課題だが、即効薬は見当たらない。

再来年、世界自然遺産への登録を目指す

しかし今、奄美大島の前途に一筋の光が差し込み始めた。二年後の「奄美・琉球地域」の世界自然遺産登録への期待が高まり、官民一体となって運動を展開しているのだ。

奄美大島では1970年代、世界最大級の石油精製工場の建設計画が持ち上がったが、地元の反対運動で頓挫した。また、沖縄のような大規模なリゾート開発も諸般の事情で進んでいない。結果的に太古からの貴重な自然が維持され、世界自然遺産登録が視野に入ってきたというわけだ。

アマミノクロウサギやルリカケスなど、この地域にしか生息していない希少動物が長年、人間と共生してきた。国内第二位の面積を誇るマングローブ原生林や、シダの一種である巨大なヒカゲヘゴの原生林が広がり、そのスケールは見る者を圧倒する。ハブは危険な存在だが、そのおかげで山間部の乱開発が阻止されてきた側面もあり、まるでブロッコリーのように密度の高い森林が島を埋め尽くす。また、奄美大島は太平洋と東シナ海に挟まれ、海の幸も非常に豊かだ。「東洋のガラパゴス」という看板通りに、「生物多様性」が見事なまでに維持されている。

防風林としても役立つ観葉植物「アダン」

マングローブの原生林

ヒカゲヘゴの原生林

奄美市役所で朝山毅市長にインタビューすると、島の再生策を熱っぽく語ってくれた。「大きな資本が入り、山を削って海を汚すという開発ではいけない。太古からの自然と現実の生活の調和を図りながら、（大規模リゾート開発が主体の）沖縄とは似て非なる奄美オンリーの観光政策を推進していきたい。本土の若い人からたびたび 、『奄美大島は沖縄県じゃないの？』と言われるから、認知度も上げていかないと…」―

奄美市の朝山毅市長

世界自然遺産登録を目指す奄美市役所

南海日日新聞の松井氏も「奄振がもたらした補助金頼みの経済や社会が、少しずつ方向転換している。世界自然遺産登録への運動をきっかけに、地元の資源を活かした自立型の街づくりを目指す機運が見え始めた」と言う。

松井氏は「離島が生き延びるためには、①モノを外へ②ヒトを内へ―に愚直に取り組むしかない」と指摘する。②については、羽田～奄美間の日本航空直行便に加え、格安航空会社（LCC）のバニラ・エアが一昨年、成田～奄美間の直行便を開設し、首都圏からの観光客が増え始めた。世界自然遺産のブーム到来に備え、奄美空港の施設拡充も進められる予定だ。

しかし①については、大島紬に代わる「四番打者」がなかなか見つからない。それでも、若い世代の中にチャレンジ精神が生まれてきた。例えば、大島紬を取り扱う老舗呉服店の三代目、川畑裕徳さん（38）は大島紬と皮革細工の「融合」に取り組み、財布やアクセサリーなどの企画・製作・販売を独りでこなす。

川畑さんは奄美市内の高校卒業後、上京して自動車メーカーに就職。だがそれに飽き足らず、退職してオートバイで日本列島を走破した。さらにビル解体作業などでお金を貯め、働きながらオーストラリアを周遊。ある日、先住民族が伝統楽器とドラム・ベースなどの現代楽器をコラボレーションさせ、全く新たな音楽を創り出す光景に出くわす。「これだ！」―。川畑さんは奄美市の実家に戻り、大島紬＋皮革細工の専門店「かすり」（奄美市名瀬港町）を起業した。

毎年、奄美市内の高校を卒業する400～500人のうち、ほとんどが就職・進学のため島から出て行く。その際、川畑さんの店で故郷の香りの漂う品を手に入れ、新天地へ旅立つ若者が少なくない。「おかげ様で開業前の予想より、売り上げは伸びている。将来は従業員を雇えるようになり、Uターン就職を希望する若者に職場を提供したい」と張り切っている。

「大島紬＋皮革」コラボに取り組む川畑裕徳さん
（奄美市名瀬港町の「かすり」）

シマを元気に！「奄美オンリー」の街づくりを

大切に守り続けてきた「生物多様性」によって、世界自然遺産という“配当”を受け取ることができれば、奄美大島は飛躍を遂げるはずだ。だが島を取材して歩くと、動植物だけでなく、人間の「多様性」も大事にしてきた文化の重みを強く感じる。

奄美大島では、島内に点在する集落を「シマ」と呼ぶ。南海日日新聞の松井氏は「シマは三方を山で囲まれ、逃げ道が海しかない。そういう厳しい制約条件が、独自の文化を育んできた」と解説する。島唄は実はシマ唄であり、奄美が発祥である。集落ごとに独自の方言や音階で受け継がれ、庶民の喜怒哀楽が巧みに込められている。

奄美大島に点在するシマ（集落）

シマは「ミニ国家」であり、「天然のコンパクトシティ」と言って良いかもしれない。朝山市長も「シマが違うと、言葉は東京弁と関西弁ぐらい違うこともある」と言う。実際、筆者の利用したタクシー運転手は言葉遣いから、通りがかりの老婆が同じシマ出身だと分かり、手を取り合って喜んでいた。

前述したように奄美市は10年前に名瀬市、笠利町、住用村が飛び地合併して誕生したが、朝山市長は「それぞれの集落の文化や伝統、風習や行事は守り抜いていく」と強調する。奄美市は今、「1集落1ブランド」事業を展開し、シマを元気にしようと努めている。

大量生産第一の高度成長期は画一性が要求され、それによってハードパワーの生産性向上が最大目標とされてきた。しかし、ポスト工業化社会ではソフトパワーが主役になり、多様性が創り出す価値こそが生命線になる。シマという多様性によって活力を維持できれば、この地域は生き残っていけるはず。今後、「奄美オンリー」の街づくりを大いに期待したい。

東シナ海に沈む夕日

【参考文献】
- 麓純雄「奄美の歴史入門」南方新社
- 鹿児島県地方自治研究所「奄美戦後史」南方新社
- 名瀬（現奄美）市立奄美博物館「奄美博物館展示図録」
- 奄美市企画調整課「奄美市市勢要覧2016」など

（写真）筆者
PENTAX K-S2 使用

世界三大夕日が美しい「霧の都」釧路市（北海道）
コンパクトシティが地方を救う（第8回）

産業・社会研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　中野 哲也

釧路市は北海道東部の政治・経済の中心都市である。石炭や木材などの積出港として発展し、魚介類の水揚げ高も全国一を誇っていた。しかし、こうした産業がグローバル化の荒波に呑み込まれて衰退し、人口はピークとなった1980年の約22.7万人から現在は約17.5万人まで減少。このため、市は「暮らし」に必要な都市機能を市内8つの拠点に集約した上で、それぞれを公共交通で結ぶ「ネットワーク型コンパクトシティ」を目指し、少子高齢化に立ち向かっている。

大湿原と阿寒湖　２つの国立公園を抱える釧路市

原生林の間を歩き続けて展望台に出ると、まるで競い合うように濃い緑と淡い緑が眼下に広がっていた。サバンナのような大地は地平線まで続き、その中を川が悠々と流れる。人間の手の及ばない、広大で神秘的な光景。それに圧倒されていると、やがてすべてが濃い霧に包まれて姿を消した…

サテライト展望台から望む釧路湿原

この釧路湿原の誕生はおよそ3000年前にさかのぼり、日本最大の低層湿原である。水鳥など湿地の生態系を守る、ラムサール条約の登録湿地として1980年に国内で初めて指定。1987年には国立公園に指定された。面積は約2.9万ヘクタールに達し、東京ドームを6000個以上も呑み込んでしまう広さだ。

ヨシやスゲを主体とする湿原には、国の特別天然記念物タンチョウのほか、国内最大の淡水魚であるイトウやキタサンショウウオなどがひっそりと生息している。太古からの自然の力と、近年は人間の努力によって、極めて貴重な生物多様性が奇跡的に保護されてきた。

2005年、釧路市、阿寒町、音別町が合併し、新生「釧路市」が誕生。その結果、釧路市は釧路湿原、阿寒という二つの国立公園を抱えることになった。釧路市街からバスに2時間ほど乗ると、阿寒湖に到着する。国の特別天然記念物・阿寒湖マリモ（毬藻）が湖底に眠るほか、温泉街やアイヌ民族のコタン（集落）があり、訪日外国人観光客の間でも人気を呼んでいる。

マリモが生息する阿寒湖

最大30センチにも生長

伝統文化を守るアイヌコタン

釧路の市街地にもオンリーワンの個性がある。その中心となるスポットが、釧路川に架かる幣舞橋（ぬさまいばし）。橋上では四体のブロンズ像が四季を表現する。それと夕日が重なり合う時刻になると、市民や観光客が集まって来る。その夕日の美しさは、いつしか世界各港を回る船員の間で評判になり、釧路はバリ島（インドネシア）、マニラ（フィリピン）と並んで「世界三大夕日の街」と称される。また、釧路は「霧の都」とも呼ばれ、幣舞橋が白いベールに包まれていく光景はファンタジー映画のーシーンのようだ。

「世界三大夕日の街」と称される釧路（A-HDR撮影）

夜霧に包まれる幣舞橋

幣舞橋の周辺には釧路フィッシャーマンズワーフ「MOO（ムー）」や、北国ならではのガラス張りの全天候型緑地「EGG（エッグ）」、旧釧路新聞社に記者として一時勤務していた石川啄木ゆかりの史料を展示する「港文館」などがあり、遠方から訪れた者を裏切らない魅力にあふれている。

啄木像（港文館）から望む、釧路フィッシャーマンズワーフ「MOO」と全天候型緑地「EGG」

また、釧路はグルメの街でもある。JR釧路駅に近い和商市場は市民の台所であり、超新鮮な魚介類が毎朝大量に並ぶ。小皿に少量盛られた刺身や魚卵を買い、自分だけの「勝手丼」を作ることもできる。「炉端焼き」発祥の地ともされ、炭火で丹念に焼き上げる職人技によって、海山の幸の美味しさが見事に引き出されていく。

魂を込めて焼き上げる「かじか」の川越洋二さん
（釧路市栄町4-2　☎0154-22-2526）

高速道路が到達するまでに59年が･･･

幣舞橋を中心に魅力が幾つも輝く一方で、市街地には「影」も見受けられる。鉄路の玄関口となるJR釧路駅は閑散としており、駅前やメインストリートの北大通には空きビルが目立つ。駅に近い商業ビルも今夏で閉店した。人口減少と少子高齢化は、この街からも確実に体力を奪っている。冒頭で紹介したように釧路市の人口は約17.5万人まで減少。日本創成会議は2040年には約10.6万人まで減ると推計し、消滅可能性都市の一つに挙げている。

JR釧路駅

空きビルが目立つ市街地

釧路市役所を訪ね、蝦名大也市長（えびな・ひろや=57）にインタビューを行った。市長は「戦後、この国は東京のインフラ整備を優先し、非常に効率の良い社会を築き上げる一方で、地方の開発を後回しにした。例えば、1957年に釧路に通じる高速道路の計画ができていたのに、（2016年3月に道東自動車道が阿寒ICまで延伸して）実現するまで59年もかかった」と溜め息をつく。釧路で生まれ育った市長は「高校卒業の同期で地元に残っているのは一割しかいない。ほとんどが進学や就職で札幌や東京などに出ていったまま。働く場さえあれば…」と肩を落とした。

釧路市の蝦名大也市長

このため、蝦名市長は地元の雇用創出に力を入れる。ただし、「大企業の工場を誘致する時代ではない」と認識しており、市が企業に対して独自のアンケート調査を実施。求められる人材をキメ細かく聴きだし、それを学校現場にフィードバックするなど、地道な努力を積み重ねている。

また、市長は「北海道を食料供給基地ではなく、食料基地にしたい。大量生産時代は原料供給を担っていたが、これからは農林水産業に地元でモノづくりの要素を加えなければ生き残れない」と強調する。インタビューを行った市役所応接室のソファーも、カラマツの枠にエゾシカの皮張りという「メイド・イン・釧路」。市の面積の74%を森林が占めるため、市は造林・造材業、製材業、建設業者などによる「円卓会議」を設け、森林資源の活用に知恵を絞り合う。

訪日外国人2000万人時代を迎え、釧路市もインバウンド消費の取り込みに躍起だ。前述したように市内に二つの国立公園を抱え、観光資源に恵まれている。しかし蝦名市長はそれに安住することなく、行政の垣根を越えて課題に取り組む。例えば、国内最高の透明度を誇る摩周湖を持つ弟子屈町（てしかがちょう）と連携し、「阿寒国立公園」を「阿寒摩周国立公園」に名称変更するよう国に働きかけている。釧路市は外国人宿泊客数を倍増させ、2020年には延べ約27万人に引き上げたい考えだ。

国内最高の透明度を誇る摩周湖（弟子屈町）

また、最高気温が東京より10度も低いという夏場の冷涼な気候を利用し、釧路市は「避暑生活」を積極的に提案する。その結果、4日間以上の長期滞在者数とその滞在日数は2011年度に道内1位となり、5年連続でトップの座にある。立地制約の少ないIT関連企業や大企業のサテライトオフィスなどが「涼しい釧路」に注目すれば、雇用も拡大していくだろう。

真夏は「ヒアガーデン」で乾杯

釧路市の再生策について、日銀釧路支店の植木修康支店長に見解を尋ねると、明快な答えが返ってきた。「食料も観光もブランド化、あるいは高級路線を追求したほうが良い。ものすごい数の観光客に来てもらう必要はなく、欧米の富裕層といったクオリティーの高いインバウンドに照準を合わせるべきではないか」―

お年寄りが歩いて暮らせる街に

人口が22万人を超えていた1980年前後、当時の釧路市は25万人の街を目標に据えていた。将来人口の増加を前提に市街が拡大したが、期待とは裏腹に人口は減少に転じてしまった。その結果、肥大化した市街地を、人口減で乏しくなる財政で支えなければならない。蝦名市長は「これでは中心市街地が空洞化するのも無理ない。と言って、市街地を昔のように小さくできるわけもない」と顔を曇らせる。

そこで釧路市は「暮らし」をキーワードに掲げ、買い物・医療・福祉といった生活に欠かすことのできない機能を市内8カ所の「拠点」に集約し、コンパクトな街を創ろうという政策に転換した。北海道は圧倒的なクルマ社会だが、拠点同士をバス中心の公共交通機関で結び、「お年寄りでも歩いて暮らせる、ネットワーク型のコンパクトシティを目指す」（蝦名市長）という。

これに関して、前出の植木支店長は「道路が広いのにクルマの数は少ないから、自動運転が進展してきた場合、真っ先に採り入れることが容易な地域。ドローン（無人飛行機）の導入にも向いている。イノベーション（技術革新）に対し、柔軟に対応できるように進めていくなら、ネットワーク型のコンパクトシティは非常に良いコンセプトだと思う」と評価する。

中国など新興国は固定電話の時代を経ず、いきなり携帯電話の社会を築き上げた。それによって電話回線網などのインフラ投資負担が軽くなり、先進国にはない優位性を得た。日本の地域社会も東京の縮小相似形を目指していたら、未来への道は決して開かれない。イノベーションを巧みに活用しながら、不利を有利に変える「逆転の発想」で街づくりが期待される。

七色に変化する釧路の夕景（A-HDR撮影）

（写真） 筆者
PENTAX
K-S2 使用

「海の京都」で公共交通の空白解消　京丹後市（京都府）
コンパクトシティが地方を救う（第9回）

産業・社会研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　中野 哲也

JR京都駅から特急に2時間ほど乗ると、日本三景の一つに数えられる天橋立。ここ丹後半島は近年、「海の京都」として注目を集めている。さらに西に進むと、日本海に臨む京丹後市（京都府）に入る。峰山、大宮、網野、丹後、弥栄、久美浜の6町が「平成の大合併」で一緒になり、2004年4月に市制が施行された。総面積は501平方キロに達し、東京・山手線の内側の約8個分に相当する。旧6町がコンパクトな街づくりを進めながら、京丹後市は6つの個性を公共交通でネットワーク化したい考えだ。

しかし長年にわたり過疎化が進み、人口は約5.7万人まで減少。高齢者の比率が非常に高く、移動手段の確保が年々難しくなっている。このため行政と市民が一体になり、「ささえ合い」をキーワードに公共交通の空白地を解消しようと懸命に取り組んでいる。

日本三景の天橋立（京都府宮津市）

日本海沿いに絶景が連続する「間人」（たいざ）

「間人」と書いて「たいざ」と読む。京丹後市丹後町にある小さな集落だが、歴史のロマンが漂い、日本海沿いの海岸線には風光明媚なスポットが幾つもある。言い伝えによると、聖徳太子の母である間人（はしうど）皇后が一時この地に身を寄せ、「はしうど」を地名として授けた。しかし、地元の人々は恐れ多いため、皇后が当地から「退座」した後、間人を「たいざ」と読むようになったという。

海岸には間人皇后・聖徳太子の母子像が造られ、その前に高さ20メートルに達する立岩（たていわ）がそびえる。島のような安山岩の巨岩。伝説では鬼が封じ込められており、日本海の荒波がぶつかると号泣する鬼の声が…。この海岸線には「屏風岩」や「丹後松島」といった名勝もあり、絶景が連続するドライブコースになっている。冬場、間人港で水揚げされる松葉ガニは「間人ガニ」と呼ばれ、1匹数万円もする高級食材として知られる。

立岩

間人皇后と聖徳太子の母子像

屏風岩

間人ガニ

このように間人を中心とする丹後町は、歴史と自然が織り成す魅力にあふれる。だが、少子高齢化の荒波から逃れることはできない。同町の人口は広域合併前の約7100人から、2016年4月には約5600人まで減少。この間に65歳以上の高齢化率は30.5%から40.0%へ上昇し、京丹後市全体の34.2%を大きく上回る。一日十数本の路線バスはあるものの、幹線道路が主体である。支線道路の沿線でクルマの運転ができない人は「交通難民」になってしまう。人口が減ると民間交通機関の採算がとれないという悪循環に陥り、2008年には丹後町で唯一のタクシー会社営業所も撤退してしまい、「タクシー空白地」となった。

京丹後市は危機感を強め、2014年にNPO法人「気張る！ふるさと丹後町」に委託する形で「市営デマンドバス」の運行を始めた。2路線でそれぞれ隔日10人乗りの車両を運行し、運賃は上限200円に抑えた。ＮＰＯ法人との協働による京都府下で初のデマンドバスは住民に喜ばれる一方で、幾つかの問題点も浮き彫りになった。例えば、運行が隔日の上、乗車には前日午後5時までの予約が必要であり、路線バスに比べると利便性で劣る。だが運行本数を増やしたくても、NPO法人はバス運転手を確保できない。

このためデマンドバスを導入しても、公共交通の空白地（自宅から最寄りの駅あるいはバス停まで500メートル以上離れている地域）はなかなか解消できない。京丹後市企画政策課公共交通係長の野木秀康さんは「クルマを運転できる80歳過ぎのおじいさんが善意から、近所に住む90歳のおばあさんを病院まで送り届けている。その姿を見て、『何とかしてあげたい』というNPO法人の熱い想いに触れ、行政として出来る支援をしたいと思いました」と話す。

「ウーバー」アプリ導入で「ささえ合い交通」

そこで野木さんが制度面でアドバイスを行い、市役所OBでNPO法人専務理事の東和彦さんがマイカーを保有するボランティアドライバーを確保した上で、そのドライバーと移動したい住民をマッチングさせる「ささえ合い交通」の検討が始まった。マッチングには、米国で急成長中の配車サービス会社Uber（ウーバー）のスマートフォン用アプリを導入することにした。ウーバーの配車システムを自家用有償旅客運送に活用するのは、日本で初めての試みである。

「ささえ合い交通」で使われるマイカーと
野木さん（左）、東さん（右）　※一部修正あり

NPO法人が運行主体となり、国土交通大臣から道路運送法に基づく自家用有償旅客運送の登録を受け、2016年5月26日に「ささえ合い交通」がスタートした。運行管理者の東さんは安全運転を確保するために、各ドライバーの体調や車両の整備状況をキメ細かくチェックする。登録ドライバーは18人（うち女性4人）で平均年齢62歳。利用時間は毎日午前8時～午後8時である。

運賃は最初の1.5キロまで480円。その後は1キロ毎に120円加算だから、通常のタクシーの半額程度である。東京海上日動火災保険の協力により、通常の車両保険（対人・対物無制限補償）に加えて、二次的保険が提供された。その結果、ドライバーがお年寄りを車両に誘導する際に発生した事故なども カバーされるという。

筆者も「ささえ合い」に乗車するため、ウーバーのアプリをスマホにダウンロード。クレジットカード番号の入力が必要だが、予想以上に簡単に登録できた。アプリは45カ国語に対応しており、もちろん訪日外国人が観光目的で乗ってもかまわない。間人のレストランからスマホで配車を依頼すると、程なくワゴン車が現れた。赤い統一ジャケットを着ているから、一目で「ささえ合い」のドライバーだと分かる。

丹後松島

当日のドライバーは地元出身の岡本昌明さん（69）。大阪で仕事をしていたが、今は故郷でこのボランティアに携わり、「人の役に立っているという実感があるし、色々な人との出会いが楽しいですね」と笑顔を浮かべる。途中、撮影するために数カ所で停車してもらいながら、丹後町から隣りの網野町まで約1時間乗車。運賃は3071円で領収書がすぐにメールで届いた。クレジットカード決済だから、ドライバーとの間で現金のやり取りは全く無い。

スマホが無くても「代理サポーター」が配車依頼

「ささえ合い」は地域住民と行政、NPO法人などの熱い思いを乗せて走り始めた。だが、牽引役の東さんは決して満足しておらず、「行きはヨイヨイ、帰りはコワイを何とかしたいのですが…」と悔しそうな表情を見せる。現行のルールでは、丹後町で乗車した利用客は京丹後市全域で降車できるが、帰りは丹後町外から乗車できないからだ。

このように既得権が絡む規制が立ちはだかるものの、「ささえ合い」は着実に前進している。昨年10月には、お年寄りの視点に立ってサービス改善に踏み切った。スマホやクレジットカードを持っていない人に代わり、配車依頼をしてくれる「代理サポーター制度」を導入したのだ。利用者は①代理サポーターに電話をかける②氏名や配車場所、電話番号を伝える③「ささえ合い」に乗車する④3日以内に代理サポーターに現金で支払う―という手順を踏めばよい。

過疎地域における路線バスの運行を維持するために、全国的に行政が財政支援を行なっている。こうした中、京丹後市は市内運賃の上限を200円に抑制。「700円×2人」ではなく「200円×7人」に発想を逆転し、年間利用者数を17.3万人から39.8万人に拡大した。また、丹後町と同じくタクシー空白地となった網野、久美浜両町には、電気自動車（EV）を使った乗り合いタクシー（初乗り運賃500円/人）を導入した。また、唯一の鉄道である京都丹後鉄道も、高齢者や高校生にとって欠かせない足になっている。

路線バス市内運賃は上限200円

ローカル色豊かな京都丹後鉄道

こうした施策の着実な実施により、京丹後市は公共交通空白地の人口を6町合併前の1万1800人から、2024年には100人まで減らそうとしている。三崎政直市長にインタビューすると、「ウーバー方式の前途にハードルがあるのは事実だが、何とかクリアしていきたい」と述べ、「ささえ合い」を維持する考えを示した。

また、三崎市長は運賃上限200円バスについても、「高齢者はバス停まで歩いていくのが厳しい。だから、主要道路という幹だけでなく枝葉までバスを走らせないと、住んでいただけなくなる。空気を運ぶぐらいなら、運賃を安くして少しでも多くの人に乗ってもらいたい」という。さらに、「都市部の若い人がクルマを持たなくなった。せめて30分に1本ぐらいの頻度の公共交通を整えないと、移住者が来なくなるのではないか」と述べ、公共交通を整備する理由として都会の若者のクルマ離れも挙げる。

京丹後市の三崎政直市長

松本清張が愛した木津温泉の宿

元々、京丹後市のある京都府北部は高級絹織物「丹後ちりめん」の産地として奈良時代から栄えていた。戦後の最盛期は、「ガチャマン」（織機が「ガチャ」と音を鳴らすたび、1「万」円を稼ぐ）と呼ばれるぐらい繁盛していた。ところが着物文化の急速な衰退とともに、生産量はピーク時の数%にまで激減した。それでも、生き残った業者は歯を食いしばって伝統を守り続ける。網野町にある田勇機業を取材すると、三代目の田茂井勇人社長が「丹後ちりめんはパリ・コレクションにも出品されています。これからは海外市場の開拓が楽しみです」と目を輝かせながら、各工程を丁寧に説明してくれた。

創業85年の田勇機業

ちりめん1反に繭（まゆ）約3000個

このほか網野町には、日本海がオレンジ色に染まる「夕日ヶ浦海岸」などの絶景スポットもある。京都府下最古の温泉である木津温泉では半世紀前、松本清張が「炙びすや」に2カ月投宿して名作「Dの複合」を書上げたという。この文豪が滞在した部屋と書斎は当時のまま見事なまでに保存され、全国から清張ファンが見学にやって来る。女将の蛭子智子さんは「大正時代の建築ですから、補修する時は京都市内から宮大工を呼ばなくてはなりません。維持は楽ではありませんが、清張先生のファンのためにも頑張ります」―

夕日ヶ浦海岸（A-HDR撮影）

松本清張が愛した「炙びすや」

市役所のある峰山町では、日本で唯一という狛猫（こまねこ）や日本一短いアーケードを見つけた。また、京丹後市は海の幸だけでなく、農産物も豊かだ。特に米の美味しさは格別であり、「丹後コシヒカリ」は食味ランキングで最高評価「特A」を西日本最多の12回獲得している（日本穀物検定協会）。街並みに派手さはないが、歩いているとほっとする。ここでは戦後日本の原風景のようなシーンに何度も出会えるからかもしれない。

金刀比羅神社の「狛猫」

日本一短いアーケード「御旅市場」（約52メートル）

（写真）筆者
PENTAX K-S2

ネコも歩かぬシャッター街に奇跡が… 日南市（宮崎県）
コンパクトシティが地方を救う（第10回）

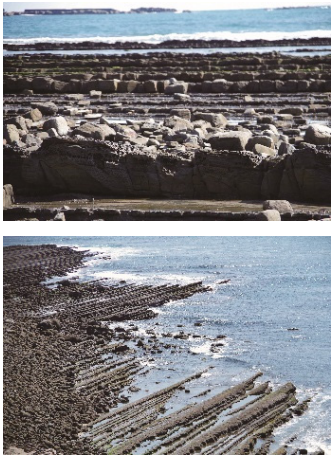
産業・社会研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　中野 哲也

いつの時代も人間にとって海は特別な存在。食の源として恵みを与えてくれる一方で、時には荒れ狂って命を脅かす。だから古代から人々は海を畏れ、祈りを捧げてきた。鵜戸神宮（宮崎県日南市）はそんな海洋信仰の聖地の一つだ。荒波と奇岩に迎えられながら、太平洋に突き出す磯の上の参道を歩く。

鵜戸と書いて「うど」と読み、空（うつ）＋洞（うろ）が語源とされる。実際、鵜戸神宮の本殿は洞窟の中にどっしりと鎮座していた。創建は古事記・日本書紀の時代にさかのぼるという。現代の土木技術をもってしても難工事だったに違いないが、一体どうやって千数百年も前に造られたのか―。その謎とロマンに吸い寄せられるように、鮮やかな朱塗りの本殿を一目見ようと参拝客が国内外からやって来る。

荒波と奇岩が連続する参道

洞窟に鎮座する鵜戸神宮本殿

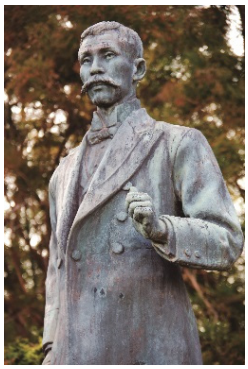


「鬼の洗濯板」と呼ばれる液状岩が不思議な日南海岸

宮崎県南部に位置する日南市は、「神話の時代」からの長い歴史と文化を誇る。市内の飫肥（おび）は江戸時代に伊東氏の城下町として栄えた。「九州の小京都」といわれるように、飫肥城大手門や武家屋敷通りなどが美しい街並みを形成し、タイムスリップしたような感覚を味わえる。

飫肥藩は財政難を乗り切るため、山野にスギの植林を進め、強度と機能性が抜群の特産品「飫肥杉」に育て上げた。また、次世代を担う人材教育に力を入れ、その藩校から小村寿太郎らを輩出した。明治維新直後、小村は政府の海外留学生に選ばれて渡米、ハーバード大学で法律を学び、帰国後は外交官から外相に就任。日露戦争後の1905年、日本全権としてロシアと厳しい交渉に当たる。困難を乗り越えてポーツマス条約の調印に成功。日本外交の礎を築いて世界史に名を遺す。

飫肥杉で復元された大手門



小村寿太郎の銅像

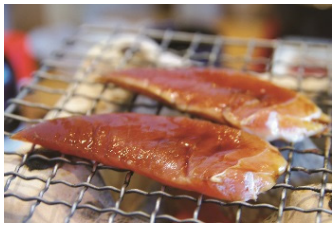
一方、市内の油津（あぶらつ）は天然の良港。江戸時代は飫肥藩が船倉を置き、堀川運河を造って飫肥杉を港まで輸送した。明治以降、油津は漁業基地として繁栄し、昭和初期はマグロ景気に沸く。赤レンガ館などが往時の勢いを今に伝え、中でも1932年に建てられた銅板葺きの「杉村金物本店」は圧倒的な存在感を示す。今なお現役の金物店であり、店内は昭和の道具が並んでいてタイムカプセルのようだ。幾多の台風被害を乗り越え、行政から補助金も受けず、3階建て店舗を80年以上保存してきた店の努力に頭が下がる。

堀川運河

杉村金物本店

日南市は広域合併の先駆けであり、1950年に飫肥、油津、吾田（あがた）の各町と東郷村が合併して誕生。その後も何度かの町村編入を経て、2009年に平成の大合併で北郷（きたごう）、南郷（なんごう）の両町と一緒になり、今の（新）日南市に至る。北郷は「美人の湯」と森の街であり、南郷は一本釣りカツオで日本一の漁獲量を誇る。市役所は市域のほぼ中央に位置する吾田にあるが、市は旧町村の個性を尊重するネットワーク型コンパクトシティを目指している。

特産のキンカン



人気急上昇「カツオ炙り重」

広域合併によって面積は536㎢になり、東京・山手線内側の8個分以上に拡大。しかし、他の地方自治体と同じく少子高齢化の荒波に呑み込まれた。人口は1950年代のピーク時から4割も減り、今や5.3万人。その一方で、65歳以上の高齢化率が35%を超える。

JR日南線（宮崎県・南宮崎～鹿児島県・志布志）は市内を走る唯一の鉄道だが、利用者はピーク時の約1割まで減った。通学高校生やお年寄りには不可欠の「足」だが、旧国鉄時代は廃線の危機に直面し、辛うじて乗り切った。

しかし昨年、JR九州が上場したことから、株主から赤字路線を問題視する声が強まる恐れが出てきた。危機感を強めた日南市は同社との関係強化を目指し、厳しい財政事情の中で1000万円の予算を組んで株式を取得した。また、市職員が宮崎市内の県庁などに出張する際は、公用車ではなくJRを原則使うように改めた。行政が先頭に立ち、市民に日南線の利用を訴えている。

市民の「足」JR日南線

中心市街地の油津商店街は1965年にピークを迎え、百貨店やスーパーのほか、最先端のアーケードの下に80店舗が軒を連ねた。ところがその後、日南市外への人口流出が加速した上、大店法（大規模小売店舗法）の規制緩和で市の郊外や宮崎市に商業の中心が移り、油津商店街の衰退が加速する。石油ショックやバブル崩壊で衰退に拍車が掛かり、ついには6店舗まで減少。スーパーの閉店後、地元の人は「ネコも歩かぬシャッター街」と呼んで寄り付かなくなったという。

40年近くにわたり、一人の男がこの商店街の盛衰に真正面から向き合っていた。黒田泰裕さん（63）は日南市出身で鹿児島大学に進学。大手証券会社から就職内定をもらい、「東京でバリバリ働くぞ」と夢を膨らませる。だが入社1カ月前の1978年3月、入社前研修に励んでいた黒田さんの元に突然、実家から連絡が…。「お父さんが倒れた。すぐに帰って来い」—

幸い、父親は一命をとりとめたが、黒田さんに「このまま実家に残ってくれ」―。黒田さんは「大学の同級生は証券会社や銀行でこれから活躍するのに、なんで俺だけが…」と抵抗したが、最終的に親の願いに従う。地元は就職難だったが、偶然にも日南商工会議所に空席が出る。以来、2014年末に事務局長で定年退職するまで、商議所一筋で働き続けた。

黒田さんは「当初は全くやる気がありませんでした」と振り返るが、故郷の衰退を目の当たりにしながら、次第に街づくりに使命感を抱く。そして、「このままでは日南市は“消滅都市”になってしまう」と危機感を募らせ、ついに立ち上がった。2014年3月、黒田さんと「九州パンケーキ」で大成功を収めた経営者の村岡浩司さん、日南市が月給90万円で公募した「再生請負人」木藤亮太さんの三人が30万円ずつ出資し、街づくり会社「油津応援団」を創設したのだ。

シャッター街と黒田さん（右）、木藤さん（中）村岡さん（左）（提供）油津応援団

まず手始めに、応援団はシャッター街で15年前に閉店した喫茶店に目を付けた。コンセプトは単なるリフォーム（改築）ではなく、新たな価値を創造するリノベーション（刷新）。世代を超えてコミュニケーションを楽しめるカフェ「アブラツコーヒー」として再生させ、応援団が直営した。2014年4月のオープン後、浮き沈みはあったが、今では月商1500万円で黒字が定着する。

この成功体験が起爆剤となり、旧呉服店がモダンな豆腐料理店に生まれ変わる。次に、応援団の主導で撤退スーパーの広い跡地はモールになり、多世代交流施設「油津Yotten」と屋台村「あぶらつ食堂」がオープン。一人でも経営できるコンテナ型ガーデンも登場し、お洒落なスイーツやパンの店などが入居した。

商店街復活の起爆剤「アブラツコーヒー」

和洋中の逸品を味わえる「あぶらつ食堂」

ところで、冬の日南市にはキラーコンテンツがある。毎年、プロ野球の広島東洋カープや埼玉西武ライオンズがキャンプ地としているのだ。中でもカープのキャンプは50年以上の歴史があり、油津商店街から歩いて5分ほどの天福球場で汗を流す。昨年の25年ぶり優勝の効果により、今年の日南キャンプへの来訪客は1.5倍の8.5万人に上り、日南市は経済効果を6億円規模と試算する。

ただ、球場で練習を見学した後、ファンが集う場がない。そこで応援団は「油津Yotten」の一角に「油津カープ館」を開設。カープ応援歌を一年中流し、新旧スター選手のサイン入りユニフォームなどを展示する。ネットでは売らない限定Tシャツなど、オリジナルグッズがキャンプ期間中は飛ぶように売れたという。カープファンの「聖地」となるよう、球場から商店街に通じる道を横断歩道まで赤く染め上げる徹底ぶりだ。

油津カープ館と赤い道

応援団の努力が実り、6つにまで激減していた商店街の店舗数は30近くにまで復活し、人通りも2.5～3倍に増えた。黒田さんは振り返る。「わずか3年でこれほどまでに変わるとは…。奇跡が起きたんです」―。出資を希望する市民株主も続々と名乗りを上げ、資本金は90万円から1600万円に。現在は黒田さんが応援団の代表取締役を務め、「油津スタイルを全国の商店街に広めていきたい！」と還暦過ぎてなお意気軒昂である。

油津商店街に奇跡は起こったが、日南市はそれで満足していない。依然として人口減少に歯止めが掛からないからだ。そこで木藤さんと同じく民間から市に招聘された「ヨソモノ」が、商工政策課マーケティング専門官の田鹿倫基（たじか・ともき＝32）さんである。田鹿さんは地元の宮崎大学を卒業後、リクルートに入社。宮崎県内の町興しにボランティアとして関わる中で、当時県庁に勤務していた﨑田恭平・現日南市長と出会ったという。

マーケティング専門官の田鹿さん

田鹿さんは﨑田市長から「外貨」獲得や街のブランディングなどを任され、雇用創出に奮闘を続ける。既にIT系企業10社が進出を決定し、60人分の雇用効果をもたらすという。油津商店街で勤務してくれれば、週末に比べてぐんと減ってしまう平日の通行量・消費額の下支えも期待できる。

また今年2月、現役の名古屋大学生でやはり「ヨソモノ」の奥田慎平さん（21）が経営するスポーツバー＆ホステル「fan！」も商店街にオープンし、地元市民とIT企業の出張者、カープファン、外国人観光客などとの交流の場が新たに生まれた。

現役名大生の奥田さんが経営する「fan！」

進出企業には、顧客をサポートするチャットセンターを開設するところが多い。東京と比較すると、家賃が7分の1程度、人件費も約8割の水準で済むという。ただし、人材の安売りはしない。田鹿さんは「正社員・月給18万円以上・賞与ありが原則です。条件が悪ければ、入社しても転職してしまいますから」と話す。

日南市を持続可能な街にするために、田鹿さんは「ドラム缶型（＝各世代の人口が等しい）の人口ピラミッドにしなくてはなりません」と指摘する。そのためには、①半分以上が転出する高卒者に少しでも留まってもらい、社会減にブレーキを掛ける②20～30歳代の地元出身者にUターンしてもらう③初婚年齢引き下げや子育て支援、世帯所得の引き上げによって出生数を増やす―といった施策が必要になるという。

そのマーケティングの哲学を聞くと、「ゆるキャラなどで同じ土俵に載らない、つまり他の自治体とケンカしないことです。『戦略』とは『戦（いくさ）を略（はぶく）』という意味じゃないですか。ほかがやらないことをやります」と言い切った。

このように「ヨソモノ」が触媒となり、市民の意識を少しずつ変革しながら、日南市は挑戦を続ける。その陣頭指揮を執る﨑田恭平市長（37）は田鹿さんら「ヨソモノ」を行政と民間企業の間に入る「通訳者」と呼び、「日南市役所の最大の強み」と話す。

また、﨑田市長は「日本一企業と組みやすい市」を標榜する。決して豊かではない財政の下、民間企業から知恵・活力・資金を引き出しながら、持続可能な街づくりを進めていくという。最近もディスプレイ業界大手の乃村工藝社と「地域活性化に関する包括的連携協定」を結んだ。「城下町・飫肥の観光地としての魅力を最大限に引き出すため、街全体を空間として捉えてプロデュースしていただきたい」と期待する。

﨑田恭平市長

日南市の日照時間は国内トップクラスであり、冬でも暖かくて過ごしやすい。海や山の幸は豊富だし、城下町や温泉、大企業の工場もある。何でも揃っているだけに、市民気質はおっとり。今後は恵まれた資源を活用しながら、「ヨソモノ」がこの街の潜在能力をどれだけ引き出すのか―。

将来再訪した時の変化に期待を膨らませながら、日南線・北郷駅から一両編成の列車に乗り込んだ。

（写真）筆者
PENTAX K-S2

震災復興と構造改革　不撓不屈の釜石市・大槌町
3.11を乗り越えて…陽はまた昇る

社会構造研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　　中野 哲也

2011年３月11日午後２時46分、マグニチュード9.0という国内観測史上最大の地震が発生し、巨大津波が牙をむいて太平洋沿岸に襲いかかった。死者・行方不明者は１万8000人を超える。岩手県三陸沿岸を取材して歩くと、東日本大震災から３年が過ぎても、被災地には深い傷痕が残されたまま。しかし、市民は陽がまた昇る未来を信じ、不撓不屈の精神で復興に粘り強く取り組んでいる。

壊滅した岩手県大槌町　立ち上がったのは…

「包丁一本見つからない…俺はすべてを失ったのか…」―。40年にわたり三陸海岸中央部の岩手県大槌町（おおつちちょう）で芳賀鮮魚店を営んできた芳賀政和さん（70）が瓦礫（がれき）の山に入ると、そこには変わり果てた自分の店が…。すると、金縛りにあったように体が動かなくなった。

芳賀さんは3.11を外出先の岩手県宮古市内で迎えた。未だかつてない激しい揺れに耐えると、沖合で立ち上っていた「白い煙」が視界に入った。突然、幼いころ父親から聞かされていた教訓が頭の中によみがえり、「大津波が来る」と咄嗟に判断。車を捨てて近くの中学校を目指して崖を登り、辛うじて一命をとりとめた。

しかし、家族や店が気がかりで、芳賀さんは居ても立ってもいられない。車に戻って必死でハンドルを握り続け、翌日未明、へとへとで故郷に転がり込んだ。幸い、妻の洋子さん（70）は無事だったが、町の中心部は「焼け野原」。地震と津波と火災により、跡形もなく壊滅していた。大槌町では人口の１割近い約1300人が犠牲になった。

崩壊した大槌町役場旧庁舎が3.11を今に伝える

未だに大槌町中心部は…

電気・ガス・水道のライフラインは断絶した。芳賀さん夫妻は冷え切ったコタツに体を突っ込み、ただただ震えるだけ。巨大津波は親類や仲間の命を一瞬にして奪い、人生の糧である店舗を破壊した。それでも、芳賀さんは「自分でも不思議だと思うんだけど、海を憎むことはなかった」―。15歳で漁師になり、30歳からは鮮魚の販売・加工で生計を立ててきた。「半世紀以上、海の恵みのおかげで俺は生きてこられた。だったら、店を再開して魚を売るしかないじゃないか！」と自分に言い聞かせると、ようやく立ち上がることができた。

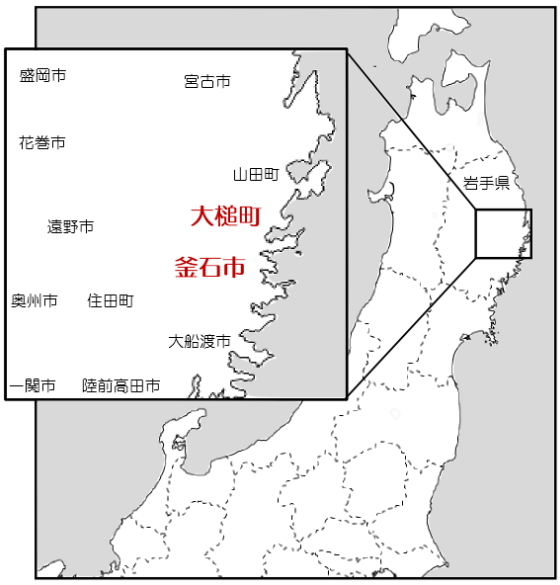
とはいえ、店舗も機械も道具もない。ゼロからのスタートを考えると、芳賀さんは再び途方に暮れる。そんな時、行政からインターネットを活用する再建策を助言された。デジタル技術とはほとんど無縁の生活を送ってきたし、キーボードもたたけない。だが、覚悟を決めて鮮魚販売の仲間にネット通販の共同事業を提案。資金はないから、ネットを通じて全国から「サポーター」（一口１万円）を募ることにした。それを再建資金に充て、成功すれば「配当」として大槌産の鮮魚を宅配するという仕組みである。

大震災から５カ月後、こうして芳賀さんと３つの業者が「立ち上がれ！ど真ん中・おおつち」プロジェクトを発足。パソコンの得意な女性職員を雇い入れ、メールマガジンのほか、ツイッターやユーチューブなどもフル活用した。朝日新聞が全国版でとり上げたこともあり、サポーターの輪は予想をはるかに超えるスピードで拡大。ネット販売は軌道に乗りはじめ、サポーターに旬のサンマなどを「配当」できるようになった。プロジェクトは協同組合に発展し、芳賀さんが理事長に就いた。

ところが、芳賀さんはサポーター5000人達成の寸前で、募集を突然打ち切ってしまった。「水産業界の革命なのに、どうしてやめたのですか」と尋ねると、芳賀さんは「次の大津波がいつ来るか俺には分からない。その時は、サポーターに『配当』ができなくなる。そう考えると胸が締めつけられ、眠れない夜が続いたんだ…」とその心境を明かした。

サポーター募集をやめても、芳賀さんの店は回復軌道を維持している。だが、原発事故に伴う風評被害にも苦しめられ、売上高は大震災前の半分にも届かない。また、崩壊した冷凍施設の再建にめどが立たないし、芳賀さんは古希になっても後継者が見つからない。難題が山積しているのだが、「やる気とノウハウがある限り、仕事は続ける。妻と喧嘩しながらね…」という芳賀さん。キラキラ輝く夫妻の笑顔が、復興に向けて最強のエンジンとなる。

壊滅から立ち上がった芳賀さん夫妻



岩手県釜石市・大槌町周辺地図　（作成）花原 啓

人の生死は「運命」で片づけられない

大槌町に隣接する岩手県釜石市。かつて市内の橋の上には、鮮魚やその加工品、野菜を扱う店がたくさん並んでいた。今は駅前橋上市場「サン・フィッシュ釜石」に生まれ変わり、市民の台所や観光スポットして賑わう。

昆政商店の菊池フサ子さん（71）は橋上市場時代から三十年余、海産物を販売している。3.11では、「小船が台風にもてあそばれているような強烈な揺れ」に襲われた。外を見ると、頑丈な街灯柱が右に左にグニャグニャ曲がっている。携帯ラジオを聴いていた市場のだれかが大声を張り上げ、「津波が来るぞ！！！」―。しかし、1960年のチリ地震津波を経験した菊池さんも、どの方向に逃げるべきか迷いに迷った。

結果として逃げた方向は正解だった。だが、菊池さんは「人の生死を『運命』で片づけたくない。そんなものはないと思うから…」と声をつまらせ、目頭を押さえた。首都圏から地元に戻り家業を継いだ、愛する弟夫妻を亡くしたという。大震災後、菊池さんは不眠や吐き気、めまいに悩まされ続けてきた。「もう３年、いやまだ３年。どっちなのか分からない…」―

（上）駅前橋上市場「サン・フィッシュ釜石」
（下）市場で販売30年　菊池フサ子さん

釜石市・大槌町（岩手県）

釜石市長も「茫然自失」　頭の中が真っ白に･･･

大震災発生直後、釜石市の野田武則市長（61）が市庁舎の２階から外を見ると、まさに巨大津波が街に襲いかかろうとしていた。「自分の手の届く世界ではなく、別の世界で起きている気がした。頭の中が真っ白になってしまい、事実として受け入れられない。『茫然自失』という言葉しか思いつかなかった…」―。しかし次の瞬間、頭の中のスイッチが「市長」という現実に切り替わる。対策本部を立ち上げ、無我夢中で陣頭指揮を執りはじめた。

街は瓦礫の山となり、電気や水道などは寸断。緊急時に備えていた衛星携帯電話が役に立たず、通信も完全に遮断。対策本部は孤立無援となり、頼みの綱はロウソクの灯りだけ。湾岸部は最大20メートル近い津波にのみ込まれ、死者・行方不明者が1000人を超えた。

海に近い街の中心部が壊滅する中、過去の大津波の教訓は生きていた。釜石の子どもは普段の授業から、「想定にとらわれるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」を三原則とする防災教育をたたき込まれている。だから大震災でも小中学生は冷静に行動し、ほとんどの児童・生徒が無事避難した。釜石小学校では、９割以上の児童が既に下校していたが、全員が教えを守り自らの命を守った。野田市長は「子供が親を説得して、より高いところさらに高いところまで逃げ、命を守った家族が少なくない」と振り返る。

3.11直後、陣頭指揮を執る野田武則釜石市長（左）
（提供）釜石市役所

現在の釜石市街

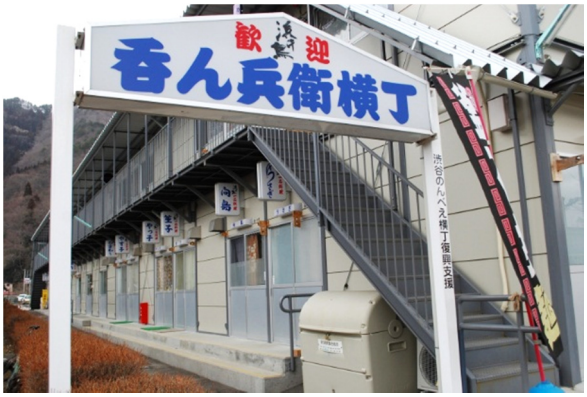
釜石の中心街を歩いて回ると、瓦礫はきれいに片づけられ、道路は概ね復旧しており、復興作業が急ピッチで進められていた。その一方で、３年経っても空き地が目立ち、放置されたままの建物に衝撃を受ける。

（上）「青いライン」まで津波が襲ってきた（釜石港湾合同庁舎）
（下）崩壊後も放置されたままの書店

復興計画を作っても、市と国の各省庁、県、地権者などとの調整が容易でなく、何度も作り直さなくてはならない。最近は、建設資材や労務単価の高騰が苦労して作った計画に影を落としている。野田市長の自己採点では復興の進捗度は30%にすぎない。しかも住居に限れば、「ゼロ%」と言い切る。なぜなら人口約３万7000人のうち、5000人を超える市民が依然、仮設住宅での生活を強いられているからだ。

家賃無料でも、仮設入居者は「断熱効果が乏しいため、冬は非常に寒い。暖かくしようとすれば、自己負担の光熱費が二倍以上かかってしまう」「狭いから、受験生がいても勉強部屋を確保してやれない」と不満を訴えている。新設された公営復興住宅への入居は始まっているが、立地や家賃などに問題点も指摘される。仮設暮らしが解消されて初めて、釜石市民は復興、いや「復幸」を成し遂げたと言えるのだろう。

（上）釜石市中心部の仮設住宅
（下）仮設酒場は復興の「エネルギー源」



日本初の洋式高炉から「鉄の街」に発展

釜石市教育委員会によると、釜石という地名の由来はアイヌ語の「クマウシ」。クマ＝「魚干し棚」あるいは「飛び跳ねる」、ウシ＝「存在する」を意味する。古代から複雑で優美なリアス式海岸に魚が集まり、それが生活の糧となってきた。年間平均気温は11.2度と東北地方では比較的温暖な気候であり、積雪も内陸部より少ない。

江戸時代中期、釜石西部の大橋で磁鉄鉱が見つかった。その後、大島高任が従来の砂鉄ではなく、鉄鉱石を原料とする洋式高炉を築き、1857年に日本で初めて銑鉄の製造に成功した。以来、釜石は「鉄の街」として急速に発展する。

太平洋戦争末期、製鉄所は連合軍による艦砲射撃の標的となる。壊滅的な打撃を受けたものの、戦後は鉄鋼産業が高度成長の波に乗り、「北の鉄人」こと新日鉄釜石ラグビー部（現在はクラブチーム「釜石シーウェイブス」）は日本選手権７連覇。釜石市の人口も最盛期には９万2000人に達し、「鉄と魚とラグビーの街」として繁栄した。

しかし、その後のグローバル化の波には抗し切れず、新日鉄は1989年に高炉の火を消し、鉄鋼の一貫生産を中止。街では「鉄冷え」との闘いが始まった。今も新日鉄住金は釜石製鉄所を維持しているが、線材の生産にとどまり、従業員も約220人（本体のみ）にすぎない。

新日鉄住金釜石製鉄所

人口は最盛期の４割　３人に１人が高齢者

釜石市の人口は最盛期の４割まで激減する一方で、市民の３人に１人が65歳以上のお年寄りになった。市は困難な復興事業を加速させると同時に、「企業城下町」から脱却し、少子高齢化も克服しなくてはならない。

野田市長は「一本足打法」だった地元経済の構造改革を打ちだし、バランスのとれた産業構造への転換を急いでいる。具体的には、①高齢者包括ケアによる、安心感のある街づくり②太陽光発電など再生可能エネルギーの拡大による、エネルギー供給基地化③コバルト合金の生産や水産業６次化（生産、加工、販売の総合化）などによる、新産業の創出―が釜石の未来を担う。

既に構造改革は芽を出しはじめた。釜石市にトヨタ自動車が協力したオンデマンド型の小型バスが走り、交通の便の悪い仮設住宅の高齢者には貴重な足になっている。市民は登録証を発行してもらった上で、予約すれば希望の停留所・時刻で利用できる。タクシーと路線バスの中間的な公共交通システムであり、運営者は需要に応じて運行を柔軟に変更できるため、過疎地でも効率的な事業が期待されている。

かつて釜石にも街中にショッピングセンター（ＳＣ）があったが、その撤退後は市内から大規模商業施設が消えた。このため週末になると、2000台ものマイカーが盛岡市などのデパートやＳＣまで出掛けるという。これでは貴重な復興資金が市内で循環せず、市外へ流出してしまう。大震災後、市はＳＣ誘致に乗りだし、「イオンタウン釜石」（56店舗、駐車場1240台）が３月14日、新日鉄住金の所有地にオープンした。従業員約620人の7割を、釜石市や近隣市町村の住民から採用したという。

一方、地元商店からは「客をＳＣに奪われてしまう」「イオンタウンに出店したくても、テナント料が高過ぎる」といった不安や不満が聞こえてくるが、野田市長は「地元での購買率を何とかして引き上げたい。イオンの集客力を販路拡大のチャンスととらえ、やる気のある商業者には業態転換や新商品開発などを積極的に支援する」と市民に訴えている。

中心街にオープンした「イオンタウン釜石」（建設中に撮影）

このほか、市は「スマートコミュニティ」計画にも着手している。学校や復興住宅などに太陽光パネルを設け、平時でも災害発生時でも電力の自給自足を目指す。また、広域風力発電や木質バイオマス発電といった再生可能エネルギーの市外供給力を増強し、地元雇用の拡大を視野に入れる。また、電力供給者と各家庭を「賢い送電網」（スマートグリッド）で結び、ＩＣＴ（情報通信技術）をフル活用して節電やCO_2排出量の抑制に取り組むという。

しかし、インフラ整備に代表されるハード面の復興だけでは、釜石の未来は拓かれない。都市間競争の時代では、観光やスポーツ、芸術といったソフトパワーが街の命運を握るからだ。市も橋野鉄鉱山のユネスコ世界遺産登録や、日本で開催される2019年ラグビーW杯の試合誘致を目指し、ロビー活動に力を入れはじめた。それを後押しするように、ＪＲ東日本が４月12日に「ＳＬ銀河」（花巻⇔釜石）の定期運行を始める。ＮＨＫドラマ「あまちゃん」の舞台となった三陸鉄道もようやく全線再開する。

（上）試運転中の「ＳＬ銀河」（ＪＲ釜石駅）
（下）全線再開を待つ三陸鉄道（北リアス線小本駅）

民間企業から市へ出向　「助っ人」が人材育成

震災復興と構造改革を同時に進めている釜石市だが、最大の問題は「人」の確保である。市内に大学がなく、若い人材の大半が市外に流出してしまう。このため、市が頼みとする強力な「助っ人」が、各企業からのボランティア社員である。

リコーから経済同友会経由で市産業振興部に出向中の野村卓哉さん（34）と堀部史郎さん（37）は仮設住宅で暮らしながら、復興事業に取り組んでいる。「仮設住宅から最寄りコンビニまで歩いて45分」「ファストフード店がないから、残業後の夕食は酒も飲まず独り居酒屋で」「朝干した洗濯物が乾く前に凍りつく」―。都会暮らしの長い２人は、赴任当初から戸惑いの連続。それでも顔には充実感があふれている。

野村さんは妻を東京に残して単身赴任。「（宮城県仙台市の）東北大出身だから、大震災直後から居ても立ってもいられず、被災地で貢献したかった。特許関連の仕事で身につけた戦略的思考が、復興事業でも役立っている」という。堀部さんはリコーでコンピューターのプログラマーとして働いていたが、同社が立ち上げた復興支援室への異動を志願。当初、釜石市内には寝る場所がなく、車で２時間かけて岩手県奥州市から市役所まで毎日通い続けた。「仕事相手がパソコンから人、それも復興に挑む市民に変わり、刺激的な勉強をさせてもらっている」―

リコーから経済同友会経由で釜石市役所出向中の野村さん（右）と堀部さん（左）

経済同友会が特別協力し、人材育成と復興計画の具体化に取り組む「東北未来創造イニシアティブ」の運営が、この２人の重要なミッションである。その人材育成道場「未来創造塾」の門をたたいた塾生の「伴走者」となり、野村さんと堀部さんは釜石の未来を担う若手経営者10人と体を張って付き合う。徹夜も辞さず議論を重ね、誉めたり、怒ったり、笑ったり、泣いたり…

2014年３月１日、第一期生の卒塾式が釜石市内で開かれた。卒業論文となる事業構想の発表では、「焼き魚のアジア輸出」「和菓子で世界中に笑顔を創造」「釜石をＳＯＢＡ（蕎麦）の里に」「三陸産ホタテ貝のブランド化」「街の（空き地、空き家、墓の）見守り隊」…。いずれの構想にも故郷への強烈な愛情と危機感があふれており、式会場では称賛する拍手が鳴り響いた。

人材育成道場「未来創造塾」の卒塾式

塾長の大山健太郎アイリスオーヤマ社長が「一人の力は大きくなくても、10人が束になれば、釜石が変わっていく第一歩になる」、副塾長の高橋真裕・岩手銀行頭取は「進むべきか退くべきか迷ったら、進んでいくべきだ。なぜなら失敗したとしても、得るものがあるからだ」とそれぞれエールを送った。そして最後に、野田市長が第一期生を「釜石維新の志士」と命名した。「志士」一人ひとりの夢が実現する時、この街もよみがえり、陽はまた昇る。

陽はまた昇る（釜石湾の日の出）

（写真）筆者
※提供分を除く

南相馬市（福島県）2015年7月1日

社会構造研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長
中野 哲也

トリプル被災地を駆けめぐるスーパー医師

「〇〇さん、きょうは4月23日です。桜の花はもう終わりですが、これから鯉のぼりの季節になりますね」―。大きな声でゆっくりと声を掛けているのは、福島県にある南相馬市立総合病院の小鷹昌明（おだか・まさあき＝47）医師。ベッドの上の女性は言葉を発しないが、視線を真っ直ぐにして先生の顔をじっと見つめる。

この女性は60代後半。パーキンソン病を患い、寝たきり生活が続いている。脳内ドーパミン（神経伝達物質）の減少によって発症するが、その原因は現代医学でも分からない。この家では娘が働きながら難病の母の介護を担い、老いた父の面倒もみている。高齢化社会で急増中の光景だが、一点だけ他の街とは違う。巨大地震、巨大津波、原発事故に見舞われた「トリプル被災地」なのである。

埼玉県出身の小鷹氏は獨協医科大学卒業後、同大学病院で神経内科医を務めていた。准教授まで順調に昇進したが、「管理職である教授を目指すことに意味があるのだろうか…」と思い悩む。2011年3月11日の東日本大震災の後、南相馬市など福島県内を視察し、マンパワーが決定的に不足している被災地の医療現場を目の当たりにする。

決断に時間はかからなかった。大学病院を辞めて南相馬市へ移り、翌年4月に市立総合病院で診療を始めた。東京電力福島第1原発の北23キロに位置する「原発に一番近い病院」である。小鷹氏は「最初は1年ぐらいのつもりだったけど…」と苦笑するが、今や南相馬で抜群の行動力を発揮し、21世紀の「赤ひげ先生」として市民から愛されている。

人口6.3万人の南相馬市内でパーキンソン病患者は80人に上るという。自宅で父や母、夫や妻の介護をしながら、病院に連れて行く家族の労力は並大抵でない。そこで小鷹氏は超多忙な病院診療の合間を縫い、毎週木曜日に往診を始めた。使っている電気自動車は、小鷹氏が面識もない日産自動車のカルロス・ゴーン最高経営責任者（CEO）に直訴し、提供してもらったという。

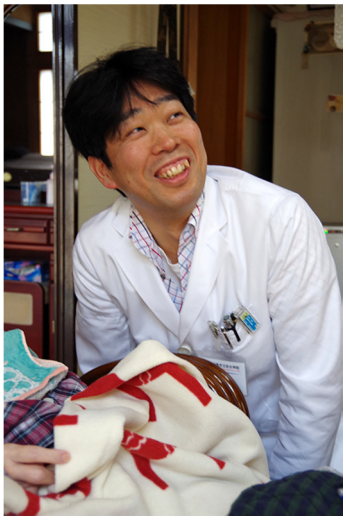
元船乗りの男性は「南氷洋まで出かけたし、スエズ運河は何度も航行したんだ」―。家を空けてばかりだったが、今は70歳を過ぎたパーキンソン病の妻の介護に専念する。小鷹氏から「罪滅ぼしなんですよね」と言われると、男性は照れくさそうに下を向いた。往診を受ける家庭は介護と震災復興を両立させ、放射能という「見えない敵」とも闘う。ヘルペス脳炎を患う妻の介護に従事する男性は「家内を病院に連れて行けば半日仕事になる。先生が往診してくれるから、私の負担は80%も減った」―

患者の家族は二週間に一度の往診を待ちわびており、先生が到着すると近況を一生懸命に報告する。小鷹氏の勧めによってパーキンソン病の妻を病院に預け、13年間に及ぶ介護生活で初めて温泉に行ったという男性はこう話した。「痰（たん）が喉（のど）に引っかかりはしないかと、一日24時間家内から目を離せない。温泉に浸かって本当に久しぶりにゆっくりできた」―

小鷹氏の活動は医療分野にとどまらない。大震災後、中高年の男性が引きこもり、アルコール依存症に陥る姿を見て、HOHP（ホープ＝引きこもり　お父さん　引き戻せ　プロジェクト）を立ち上げた。「男の木工教室」や「男の料理教室」などを小鷹氏がプロデュースし、お父さんたちに生きがいを見つけてもらい、自信を回復させようというわけだ。

小鷹氏は、千年以上の歴史を持つ伝統行事「相馬野馬追（そうまのまおい）」に参加しようと決意し、乗馬を一から習得。昨夏、甲冑（かっちゅう）に身を固めて騎馬武者デビューを果たした。休日を返上し寝食を忘れて地域に溶け込もうとする姿を、市民がリスペクトしないわけない。今や、地元経済界から推されて南相馬市物産振興会の会長でもある。

名刺には「エッセイスト」の肩書きもあり、南相馬から情報や洞察を精力的に発信する。今年4月、精神科医の香山リカ氏との往復書簡をまとめて刊行した（「ドクター小鷹、どうして南相馬に行ったんですか？」七つ森書館）。スーパーマンのような活躍だが、気負ったところが全くない。「元々の街の文化を活かしながら、地元の人と一緒に楽しんでいるだけです」―。このさわやかな笑顔が、困難に立ち向かう市民に勇気を与える。



（写真）筆者
PENTAX K-50

巨大津波を生き抜いた「奇跡の一本松」　岩手県／陸前高田市
ゼロからの3.11復興　長くて短い5年間

産業・社会研究室　主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長　中野 哲也

2011年3月11日の東日本大震災では、1万5000人を超える無辜（むこ）の命が奪われ、2500人以上が行方不明になった。それから5年が過ぎても、被災地では今なお多くの市民が仮設住宅での生活を余儀なくされ、将来への不安を抱えたままだ。中でも三陸海岸南部の陸前高田市（岩手県）は、巨大津波によって中心部が壊滅した結果、復興事業が困難を極める。全国的に3.11の風化を否めないが、この街にとっては現実以外の何物でもない。

東北新幹線の一ノ関駅（岩手県一関市）からJR大船渡線で約1時間20分、気仙沼駅（宮城県気仙沼市）で途中下車した。ここで線路が寸断されているからだ。大震災で駅舎や橋梁が流失し、気仙沼～盛（岩手県大船渡市）間は不通になったまま。過疎化が加速するこの地域では、復旧工事に数百億円を投じても採算が取れない。このため、JR東日本はBRT（Bus Rapid Transit ＝バス高速輸送システム）を導入した。線路を撤去した専用道の区間は信号や渋滞が無いため、バスは列車並みのスピードで快走する。一般道の区間では遅くなってしまうが、鉄道に比べて駅（＝停留所）や運行本数を容易に増やせるという利点がある。

気仙沼駅からBRTに乗り、陸前高田市内に入った。大震災前、太平洋に臨む高田松原は2㎞にわたって白い砂浜が続き、東北有数の海水浴場としてにぎわい、日本百景の一つにも数えられていた。だが、3.11の巨大津波によって7万本の松の木が流失し、高田松原は消滅した。この中で、高さ約27.5メートル、樹齢約170年という老木が唯一生き残り、「奇跡の一本松」と名付けられた。陸前高田市は浸水高で最大17.6メートルもの津波に襲われ、死者・行方不明者が1700人を超えた。市街地は壊滅状態になり、市外への転出者が急増。その結果、大震災前に2万4000人を数えた人口は、今や2万人を切っている（国勢調査の速報値）。打ちひしがれた市民にとって、奇跡の一本松は復興を目指す上で精神的な支柱となった。

市内を歩き始めると、3.11から時が止まっている光景に何度も出会う。今泉天満宮の杉の巨木は驚異的な生命力を発揮したが、神社の碑はなぎ倒されたまま。内部が滅茶苦茶に破壊された「道の駅・高田松原」は、今も水の恐怖を生々しく伝える。気仙中学校（当時の生徒数93人）は屋上まで津波に呑み込まれたが、生徒は高台に逃げて全員が無事だった。その朽ち果てた校舎は、日常の防災教育と危機管理の大切さを教えてくれる。総延長3kmのベルトコンベヤーは既に使命を終えたが、膨大な量の土砂を運んで市街地のかさ上げ工事に大いに貢献した。

陸前高田市（岩手県）

3.11で壊滅した陸前高田市では今、海岸部で東京湾平均海面から最大12.5メートルの防潮堤の整備が、市街地では最大12メートルのかさ上げ工事が進められている。ただ、いずれも難工事で長い時間を要するため、5年経っても中心部は広大な「空き地」のように見える。高田、今泉両地区の土地298.5ha（東京ドーム約64個分）には約1122億円が投じられ、区画整理事業が進行している。この両地区に2120戸、約5900人が居住する計画だ。その一方で、タクシー運転手に聞くと、「巨大な防潮堤によって海が見えなくなり、津波が来ても目で確認できないのではないかと不安に思う。それに広大な空き地は本当に（住宅や商店などで）埋まるのだろうか」と複雑な表情を浮かべた。

地元で観光ガイド歴15年の新沼岳志さん（70）は「語り部」として巨大津波の恐ろしさを伝えている。3.11当時は市民会館で確定申告をしていたが、「ガラガラガラ…」という激しい揺れを感じると、一目散にマイカーで帰宅した。「自宅は高台にあったが、築100年以上の古民家のため、妻が下敷きになったのではないか…」と案じ、背筋が凍ったという。幸い、妻も自宅も無事だった。しかし高台から見下ろすと、市街地は見たこともない黒い激流に呑み込まれ、大量の煙があちこちから上がっていた。

新沼さんは多くの友人や親類を失い、絶望の淵に突き落とされた。「こんな状態で観光客なんか来るはずもない」と思い、ガイドを廃業しようと考えた。3カ月後、旧知の観光会社から「大震災の『語り部』をやりませんか」と促され、悩み抜いた末に「地元のためになるのなら…」と立ち上がった。だが、瓦礫（がれき）だらけの市街地には客を案内できず、山の頂上に連れて行って懸命にガイドを続けた。話し始めると涙があふれ出し、言葉にならない。そして客も涙を流す―。その繰り返しだった。

新沼さんは「市民が歯を食いしばり、あきらめないで復興に取り組めた原動力は、手弁当で来てくれた国内外のボランティアの皆さんです。そのもの凄いパワーに市民が動かされました」と振り返る。また、自衛隊の尽力にも頭が下がったという。「瓦礫からの救出作業や遺体処理は自衛隊しかできません」―。今、新沼さんは全国各地から講演を頼まれ、愛して止まない故郷を懸命にPRしている。「陸前高田は海、山、川すべての幸に恵まれ、緯度が高いわりには寒くないし、雪もほとんど積もりません。そして何より人情に厚い土地柄なんです」―

「語り部」を務める観光ガイドの新沼岳志さん（中央）
陸前高田市観光物産協会の淺沼ミキ子さん（左）
佐々木真紀さん（右）

陸前高田市の戸羽太市長（51）は2011年2月に初当選。その翌月、東日本大震災に見舞われ、最愛の妻を失くした。一瞬にして壊滅した街の復興に向け、寝食を忘れて陣頭指揮を執りながら、子ども二人の父として奮闘を続ける。戸羽市長にインタビューを行い、3.11から5年間の総括や街の再生ビジョンなどをうかがった（2016年2月4日取材）。

戸羽 太氏（とば・ふとし）
1965年神奈川県生まれ。1995年陸前高田市議会議員（3期12年）、2007年陸前高田市助役から副市長、2011年2月陸前高田市長当選、2015年2月再選。

――まず、この5年間を総括していただけますか。

個人的には様々な後悔がたくさんあります。大震災は市長就任直後の出来事ですから、当選さえしなければ、家族は犠牲にならなくて済んだのではないか…。モヤモヤしたものが消えない5年間でした。多数の市民が犠牲になり、もっと速く復興を進めたかった。しかし国も態勢が整っておらず、しかも「既存の法律の中でやりなさい」と言うばかり。ジレンマあるいは歯がゆさとの戦いでした。長いようで短く、短いようで長い5年間です。

当初、自分を励ますためにも、「明日が見えない。けれども、2～3年後の陸前高田は絶対に良くなっているはずだ」と信じ、復興に取り組みました。しかし、そのような私のイメージ通りにはいきませんでした。「5年も経てば、少なくとも住む所ぐらいはできているだろう」という思いでやってきましたが、現実にはなかなか…
※注＝2015年10月末の応急仮設住宅の入居者数は3411人（最大時から2224人減）

――復興を進める上で最大の問題点は何でしたか。

被災地のやろうとすることが、（永田町・霞が関に）うまく伝わらないシステムです。はっきり言うと、国は地方自治体を100%は信用していません。国は地方分権を掲げる一方で、「自治体にお金と権限を預けて大丈夫なのか」と疑っています。だから、国の関与が中途半端になります。私は「国がそこまで言うなら、好きなようにやってくださいよ」と申し上げたことがあります。すると、「いやそうじゃない。住民の皆さんの意向に沿って国は寄り添うだけ」という。「それじゃ、こういうことがしたい」と要望すると、「いや無理です。ダメですよ」―

ダメならダメでいいんです。それならその理由を明らかにしてほしい。「今の法律の枠内でできる方法を一緒に考えてくれませんか」ということなのです。被災地からすると、「ほれみろ、国は『寄り添う』なんて言っているが、本当にそんな気持ちがあるのか」という絶望感でがっくりする。「だったら、最初から期待なんか持たせるな！」と言いたくなります。しかも、ちょっとした話で私も職員も（列車を乗り継いで）6時間かけて上京しなくてはなりません。

安倍晋三首相にも申し上げてきたのは、「被災地の立場でものを考えてください」ということです。そうすれば、（政策や事業の）優先順位も見えてきます。「自分の親が陸前高田で被災して仮設住宅にいるとしたら、何が求められているだろう」と考えてくれれば、自ずと想像できるはずです。大きなギャップというより、ちょっとした言葉足らずなどが、（国と被災地が）しっくりいかなかった大きな要因ではないかと思います。

――今、被災地で最も必要なものは。

もう5年になり、復興事業で手を付けられていないものは基本的にありません。今、政府に対しては、「なぜ次に備えないのですか」と申し上げています。南海トラフ地震などの発生が懸念されているからです。皆さん、5年経った陸前高田を見てください。スーパーゼネコンが最先端の技術を投じているのに、これしか復興が進んでいません。「やはり何か制度に問題があり、復興の妨げになった法律がある」と分かったから、それを今のうちに炙り出して南海トラフに備えようということです。そうしなければ、東日本大震災で亡くなった人々は犬死にじゃないですか。国には真剣に考えていただきたい。

――「集中復興期間」が2015年度末で終了し、2016年度から5年間の「復興・創生期間」では国が被災自治体に一部財政負担を求めることになりましたが。

5年で復興が終わった自治体もありますが、それは「軽傷」だったからです。一方、われわれは「意識不明の重体」から少しずつ復活している状態。傷が深くゼロからのスタートを余儀なくされた自治体に、どうして国は負担を求めるのでしょうか。私は「名医が来て大手術しても、助かるかどうか分からない。傷に塩を塗るようなものではないか」と主張したのですが…。これからは「創生期間」というが、やはり国は3.11を過去の話と認識しているのではないでしょうか。その一方で、5年も経つのにボランティアで来てくださる方がたくさんいます。本当にありがたく思います。

――他の被災地に比べると、陸前高田市の復興は難航しているように見えますが。

難航しているのではなく、やられ方が他とは全然違うのです。（リアス式海岸では珍しく広い平野があだになり）市街地では民家が一軒も残っていません。（広田湾には）島がなくて湾口も広いため、もの凄い津波が襲いかかり、気仙川を8キロも上っていきました。土地を最大12メートルかさ上げし、（東京湾平均海面から）最大12.5メートルの防潮堤も整備します。コンパクトな街づくりを進めると同時に、3.11級の巨大津波が来ても絶対に家屋が浸水しないようにします。しかし、区画整理事業には長い時間がかかります。2000人に上る地権者一人ひとりに対し、職員が全国を飛び回って「どこに住みたいですか」と聞いているところです。

――なぜ復興計画を8年間と決めたのですか。

正直言うと、根拠はありません。家がすべてなくなり、瓦礫が積み上がり、戦場の跡のような光景が広がりました。その中で、号泣するおじいちゃんとおばあちゃんに「あと10年頑張ろう」と言えますか。逆に、5年と言ったらウソになります。だから、8年なんです。時間がかかればかかるほど、市民はあきらめの境地になります。国にもそういう視点を持ってほしいと切に願います。

――今後、どのような産業や雇用を創っていきますか。

高田松原が流失した海岸沿いに津波復興祈念公園を整備し、観光・防災教育の拠点にします。その中には国の追悼・祈念施設も造られ、将来は3.11の式典も開かれる予定です。（原爆の爆心地に設けられた）長崎市の平和公園のイメージになります。奇跡の一本松・ユースホステルや気仙中学校、雇用促進住宅、道の駅などを遺構として保存し、「どの地域にもこういう事が起こり得る」と伝えていきます。既に、大手企業が陸前高田を新人教育などの開催地に選んでくれ、研修を実施しています。

また、「ノーマライゼーション（正常化）という言葉の要らない街」をつくります。日本の中では、障がい者や高齢者、言葉の分からない外国人、妊婦といった社会的弱者に対する扱いが非常に悪い。陸前高田は分け隔てなく、だれとでも仲良くなれる街を目指します。街が壊滅してしまったので、歩道も公共施設も店舗もゼロから造ることができますから。今までは「うちは狭いから、車椅子の人はごめんなさいね」と言っていた店も、今後は許されません。人が訪ねてくる所にすべて筆談ボードを置くよう、行政も応援していきます。

昨年7月、ふるさと納税を再開し、御礼の品の梱包作業を知的障がい者に行っていただいています。それまで1カ月1万5000円しかもらえなかった手当を、最低5万円に引き上げます。家族の中で、障がい者が「自分の食べる分ぐらい、自分で稼いでいるよ」と胸を張って言えるようにしたいのです。昨年末、ボーナスが出たら、みんなすごく喜んでくれました。地元ではリンゴを生産していますが、担い手の大半が高齢者です。今後、障がい者やシングルマザーに２～3年ぐらい住んでもらい、手伝っていただきたい。自分の人生を考えられる機会を提供したいのです。

最終的な私の夢は、すべての人が街へ出られるようにすることです。日本の障がい者は外に出ない・出られない状態にあります。買い物や図書館に行くとか、当たり前のことが当たり前にできるようにしたいのです。例えば、東京で悩みを抱えている人に対し、「そんなに悩んでいるなら、1週間ぐらい陸前高田にいらっしゃい」と声を掛けます。来てみたら、障がい者がニコニコしているし、おじいちゃんやおばあちゃんも何だか分からないけど元気一杯。「俺の悩みなんて大したことなかった。ボロボロのどん底からでも、人間は立ち上がれるんだ。もう一回頑張ってみようか…」―。そう思ってもらえる街にしたいのです。

陸前高田
ふるさと納税サイト
www.taka-furu.com

（写真）筆者
PENTAX
K-S2使用

RICOH Quarterly HeadLine　臨時増刊号
地方再生の現場を歩く

発行日　2017年4月24日
発行人　神津 多可思
編集長　中野 哲也
編集部　竹内 典子
発行所　リコー経済社会研究所
〒100-0005　東京都千代田区丸の内1-6-5
丸の内北口ビルディング20F
ホームページアドレス
http://jp.ricoh.com/RISB/

リコー経済研　検索

本誌記事・写真の無断複製・転載を禁じます。

RICOH Quarterly HeadLineへのご意見やご提案は、
risb@nts.ricoh.co.jp へお願いいたします。

RICOH Quarterly HeadLine
臨時増刊号 2017
●発行日 2017年4月24日 ●発行人 神津多可思 ●編集長 中野 哲也
●発行所 リコー経済社会研究所 〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北口ビルディング20F